

ました——「モスコオの美術座へ。」この一言は實際演劇に對して熱情を持つ歐羅巴の青年の間の合詞になつてゐると言つても好いのです——

『わたしはあすこのスタニスラウスキイといふ人に會ひましたが、あの人は實に偉大な藝術家ですねえ。』

『非常に Net な人です。去年もあの人はこの Festspiel へ來ましたが、今年も又來る筈になつてゐます——あの劇場とこの學校とは密接な關係を持つてゐるのですから。』

ゴオズン・クレエグとスタニスラウスキイ——スタニスラウスキイとダルクロオズ——ダルクロオズとカンヂンスキイ——私は歐羅巴の一つの秀でた頭腦と他の秀でた頭腦とが、國と人種とを問はず、互に何處かで融け合つてゐるのを知つて、事新らしく驚嘆するのでした——私は雲表に聳ゆる一つの高山の絶頂と他の高山の絶頂とが、何百哩を隔つても互に相呼應してゐるのを目のあたり見るやうな氣がしました。

やがて私は二階の Bureau へ案内されました。そこには四五の Schreibisch と、各の學校にも繁雜な「事務」のある事を知りました。

私の年若い案内者は、丁度帽子を冠つて事務室を出ようとしてゐた、これも年の若い事務員らしい人に私を紹介して——

『君、出かける所を濟まないが、學校の Prospectus を今あるだけ揃へて持つて來て呉れないか——英語で書いてある分も。』

と言ひました。事務員らしい青年は、少しも厭な顔をせず、直ぐいそぐと部屋を出て行きましたが、やがて學校の紀要を五六冊抱へて、嬉しさうに又はひつて來ました。その様子にはみんなしてこの教育法を世間に知らしたいといふ宗教的な熱心が見えるのです。

『練習がお目につけられないで、生憎でしたな。』

事務員らしい青年がかう言ひますと、私の案内者は又残念らしい顔をして——
『ほんとにさうだ。』

と、溜息をつきながら言ふのです。

事務員らしい青年が、二人に挨拶をして外へ出て了ふと、私の年若い案内者はその五六冊の學校の紀要をみんな私の前へ出して——

『これは差し上げますから、どうぞみんな持つて歸つて下さい。英語の分にはこの學校の教授法が可なり委しく書いてある筈です。毎年の夏やる紀念祭について書いてある分も交つてゐる筈です——さう言へば今年の紀念祭の廣告がありましたつけ。』

と言ひながら、私の案内者は直ぐ側の棚から小さな引札のやうな紙を一枚とつて呉れました。

六月の十八、十九日、廿一、廿二日、廿三、廿九日には、去年の紀念祭で成功したグルツクの『オルフォイス』が全部演ぜられるとてあります。七月の三日、五日、

六日には、ボオル・クロオデルの宗教劇『神託』が始めて演ぜられるとてあります。

『オルフォイス』の好い評判は前から聞いて知つてゐました。ボオル・クロオデルの名はついこなひだ聞いたばかりなので、私はこの佛蘭西の新しい詩人の作が見たくて堪らなくなりました——しかもそれがこの學校の様式で演ぜられると言ふのですから。

『クロオデルは新しいダンテです。かれの作が舞臺に乗るのは、この學校が始めてでせう——どうです、Festspielを見に又やつて來ませんか。』

私の年若い案内者は熱心にかう言ふのです。私は旅を急ぐ必要のある事や倫敦までの旅程やを話して、出席の覺束ないのを悲しみながらも、幾度かいつそ旅程を變更して、それまでこの近所に滞在してゐようかと思ひ迷ふのでした。

『すると、あなたは井インへも寄るのですね。では、あすこに分校がありますから、あす、で Unterricht を參觀なさると好いです。私が Adresse を書いてあげますか
(177)

ら。』

かう言つて、私の案内者は Prospectus の一つの表紙に—— Wien, Favoritengasse

(178)

46. Prof. Favre.——と書いて呉れました。

『分校は今、伯林とフランクフルト、アム、マインと露西亞のペテルブルクとモスコオとにあります。井インには最近に出来たのです。倫敦にも近頃出来ました。今に世界至る所に作りたいと思つてゐます——おう、さう言へば私の名を書くのをすつかり忘れてゐました。』

と言つて、同じ Prospectus の表紙に、私の年若い案内者は、始めて自分の名を書きました——Harald Dohrn, Helleian b. Dresden.

紀要を見ますと、教頭 Dr. Emile Jaques-Daleroze の名と列んで、校長といふべき地位に Dr. Wolf Dohrn の名があります——私の年若い案内者は實にこの校長の弟であつたのです。

若いドオルン君は、やがて書棚をかい探つて、『オルフォイス』の舞臺装置や人物の運動の下圖を持つて来て呉れました。下圖は暗藍色の木炭紙にチヨオクで極荒く書いてありました。森の場面はすつかりカアテンで作るやうに書いてあります。オルフォイスが地獄へ降りて行くところは横長方形の舞臺を右の上の角から左の下の方へ引いた對角線で二等分して上の半分を空にして、下の半分を坂にしてあります。私はこの單純極まる舞臺を非常に面白いと思ひました。

『すつかりクレエグ式ですね。』

と、私が言ひますと、

『Kein Kulisse です。階段と幕とだけで、總ての舞臺を作るのです。』

と、若いドオルン君は無邪氣な得意を持つて言ふのです。

私が土産にもと持つて行つた能樂圖繪の一枚——それは『胡蝶』でした——と、歌

(179)

舞伎十八番の『矢の根』の似顔繪をドオルン君にやると、ドオルン君は大喜びで、熱心に能や歌舞伎の事を色々と聞くのです。勿論私の覺束ない獨逸語はドオルン君を満足はさせませんでした。それでも胡蝶の上品な象徴的表現と矢の根五郎のグロテスクな、力のある假面には、少なからず感動したやうでした。

二人が日本の古い芝居の話をしてる所へ、突然一人の學者らしい人がはひつて來ました。四十恰好の、餘り丈の高くない、小肥りに肥つた、鼻の下と顎に佛蘭西式の髭を持つた、髪の毛の美術家らしく亂れた人です。この人もこの學校の他の人のやうにやはり質素な服装をしてゐます。

それに氣がつくと、ドオルン君は尊敬するやうに座を立つて、直ぐその人の側へ行きました。ドオルン君が二言三言何か言ふと、その人は不思議さうな顔をしながら私の方へやつて來ました。

『ジャツク・ダルククロオズさんです。』

ドオルン君はかう言つて、その人を私に紹介しました。そして又私をダルククロオズ氏に紹介して呉れました。

私はいつかスタニスラウスキ氏に始めて會つて、何を言つて好いか分からなかつたと同じやうに、又ここでダルククロオズ氏に始めて會つて、何を言つて好いか分かりませんでした。私はさういふ場合にいつも用ひる「東洋式の外見的沈黙」を用ひながら、その事業家らしい鋭い目つきと意志の強さうな口元とをちつと見詰めてゐました。全く違つた意味で、ダルククロオズ氏も私に何を言つて好いか分からない様子でした。二人は暫く顔を見合つて、黙つて立つてゐました——併し、私は心の内で多くの事を言つたのです。私は心の内で、この偉大な藝術の哺育者にあらゆる畏敬の詞を献じたのです。

ドオルン君は私に貰つた『胡蝶』の木版繪をダルククロオズ氏に見せて、私から聞いただけの説明をして聞かせました。ダルククロオズ氏は珍らしさうに暫くちつとそれを

見てゐましたが、やがて稍濁つた佛蘭西語で「Très Charmant!」と言ひました——氏は佛領瑞西の生れです。

ダルククロズ氏は「Très Charmant!」の一語を私に聞かせたぎり、何か用事をドオルン君に頼むと、直ぐ事務室を出て行つて了ひました。

『非常な精力家です。あの人自身があの人の教育の結果の好い例です。』

ドオルン君はダルククロズ氏の出で行つた戸口を見詰めながら、かう言ひました。

ドオルン君はもう一度私を「Sally」へ案内するのでした。さつき誰もなかつた舞臺には今賑かな聲がしてゐます。ピアノを弾いてゐる一人の老人を取り圍むやうにして、散歩服を着て帽子を冠つた儘の若い婦人が三人、しきりに歌の稽古をしてゐるのです。娘達は老人に向つて、唄ひかけては何か註文を出し、唄ひかけては何か註文を出してゐました。

『今夜の音樂會の Probe です——分かりますか、あれは日本の歌ですよ。』

と、ドオルン君が言ふのです。併し、私にはその娘達の唄つてゐるのが、どうしても日本の歌とは受け取れませんでした。

『どうです。四時まで待つて、音樂會へ臨んで行きませんか。』

ドオルン君は親切にかう言つて呉れましたが、私は電車が心配でした——

『せめて音樂會へでも臨んで行きたいのですが、どうしてもあしたの朝立たなければならぬので、時間がございせんから。』

『さうですか。それは残念です。』

ドオルン君はかう言ふかと思ふと、私一人を置いて、どつかへ行つて了ひました。暫くすると突然、軽い明かるい氣持の好い電鈴の音が方々で鳴り始めました。やがてそれが止むと、天井や左右の壁の白い布の中に無数の電氣が美しくつきました。そこへドオルン君がニコ／＼しながらはひつて來ました——

『どうです、開演を知らせる Kingeln は。中々好い音でせう。電気はどうです。今は晝間で外の光線がはひりますから、十分 Helligkeit が分かりますまいが、夜は中々好いのです。現實の光ではありません。夢の光です。』

ドオルン君が自慢をするのも無理はありません。白い布の中に規則正しくついでる電燈は、この廣い Saal を、隅から隅まで夢的に照らすのです——私は燈籠の中にあるながら、燈籠を外から見てゐるやうな、しつとりした柔かな感じに身を包まれて、暫くほうつとしてゐました。さうしてかういふ光の中で、踊を見る事が出来たり芝居を見る事が出来たりしたら、どんなに幸福だらうと思ひました。

ドオルン君はやがて私を學校の外へ連れ出して、規則正しく離れて立つてゐる寄宿舎の内の一番大きいのを私に見せるのでした。

私は先づ讀書室らしい美しい廣い部屋を見せられました。そこには赤い模様のある

諸威風の箆筒が置いてあります。天井の梁には櫻の花の模様を打ちぬいた日本の釣燈籠が下がつてゐます。美しいカミン燧、色々な式の可愛らしい椅子や机、机の上の美しいエムプロイダリイ、厚い絨氈、薄い帷——實に善を盡し美を盡した住み心地の好ささうな部屋です。

„Schön zu leben!“

ドオルン君は自分で自分の物に感心するやうな調子でかう言ひました。

『生活を美しくするといふ事は、人間にとつて非常に大事な事です。かういふ部屋に住んでゐれば、おのづと精神が美しくなります。』

讀書室の隣りの一段低い所に食堂があります。この食堂も立派なもので、拭き込んだ床板がセルロイドのやうに光つてゐます。五人宛向ふ食卓が左右に五つ宛行儀よく列んでゐます。

『食堂はここ一つで、外の寄宿にゐる者もみんなここへ喰べに来るのです……この食

堂は椅子や食卓をどけると舞踏室になるやうに出来てゐます。』

ドオルン君は私と一緒に食堂を見おろしながら、かう言ひました。

『寄宿生の日課は普通どういふ順序なのです。』

私がかう聞きますと、ドオルン君はその問を待ちかねてゐたといふ様子で、直ぐ流暢に話し出しました——

『午前七時の銅鑼で一日が始まるのです。寄宿舎は直ちに活動し始めます。或者は食事前に瑞典式體操をしに學校へ行きます、或者は七時半に食事をして、それから體操をしに行きます。いつでも初めに三十分程普通の體操をやるのです。それから耳の訓練が一課、韻律體操が一課、即興が一課あります。いづれも五十分宛で、その間に十分宛休みがあります。一時十五分過ぎに晝飯が始まつて、それから一時間の休憩があります。そして、精力のある人達は三時に實習を始めます。午後は概して自由なのですが、唯一週間に二度「Pianina」の演習があります。それから、茶が済んでから四時

から六時まで舞踏があります。或は子供の生徒の爲の韻律體操の特別練習があります。又午後には普通の課目がない、ソイオリンだの、獨唱だの、製圖だの、油繪だのの特別教授を受ける事も出来ます。或はドレスデンの晝堂へ行くなり、町へ買物に出かけるなりする事も出来ます。音樂會かオペラか古典劇に、特別に好いのががあると、熱心な連中は體を組んでドレスデンへ出かけて行きます。爲事が中々多いので、夜は成るべく早く寝る主義ですが、ドレスデンのオペラは仕合せと早く始まつて、早く終ふので誠に都合が好いのです。夜食は七時十五分過ぎに始まります。そして、管絃樂部か合唱部の部員になりたい者は、一週に二晩一緒に集まつて、ダルクロオズ氏の指揮の下に實習をする愉快を得る事が出来るのです……』

私達は再び學校の前の廣場へ出ました。

若いドオルン君は、自分の烟草入から私に埃及の金口を一本取らして、更に學校の

話を続けるのでした——

『わたし達の學校では諸國の子供を預かつて、これに韻律教育を試みてゐます。この頃「Beverly」の子供を一人預かつてゐますが、戀郷病に罹つて、困つてゐます……』

私が學校の玄關の大屋根についてゐる二つ巴の紋を指さして——

『ドオルン君、あの紋と全く同じ紋が日本にもありますよ。』

と言ひますと、ドオルン君は別に不思議さうな顔もせず——

『あれはこの學校の精神を現した紋章です——あの紋は昔から希臘にあつた紋で Rhymnus を意味してゐるのだと言ふ事です。』

二つ巴の紋の下で、玄關の階段に片足をかけながら、縁の廣い藝術家帽を冠つて、柔かい日光を浴びながら、誰かと立ち話をゐるのはダルククロオズ氏です。空はのどかに青く晴れてゐます。

赤い土に青い草が茂つてゐます。

遠くの坂の下には、黄いろい電車が私達の町へ歸るのを待つてゐます。

雲雀がしきりに何處かで啼いてゐます。ドレスデンが「ロココの故郷」なら、ヘルラアアウは「リトムスの故郷」です。

私は再會を約して、ドオルン君の美しい手を握りました。(一九一五、八、一九)

最後の舞臺

六月六日。倫敦。

フオオプス・ロバアトソンが愈「ハムレット」を最後の舞臺として、永久に倫敦の劇壇を退くと言ふ日である。

かれがヅルリイ・レエンで「倫敦のお名残興行」を始めたのは、三月の二十二日である。それからもう二月半になるが、その間に幾度「もう來週でお終ひだ」といふ通信が新聞に出たか分らない。實際役者の方では廢さうと思つてゐても見物側の要求がそれを許さないのか、或は日本などでも考へられさうな劇場側の思はせ振りな策戦から出たのか、それは分らないが、兎に角「もうお終ひだ」「もうお終ひだ」で、今日まで本當の「お終ひ」が延びて來たのである。

私は既にこの人の Repertory を一通り見てゐる。「オセロ」「エニスの商人」「失明」(キ



ツプリング)、『シイザアとクレオパトラ』(シヨオ)、さうして『ハムレット』。

この外にフオオプス・ロバアトソンは『鼠と人』といふ芝居をする。それからジエロオム・ケエ・ジエロオムの『裏三階』に『ユダのサクラメント』といふものを添へて演ずる。前者は作その者も知らないし、『失明』を見てその安價なセンチメンタリズムに失望した後でもあつたりしたので、見に行かなかつた。後者については、日本にゐる時から、多少智識も貯へてゐたので、是非見に行く積りで切符まで買つてあつたのだが、この芝居をやると坊さんから感謝状が來るといふ話を聞いて、妙に氣が進まなくなつて來たので、切符を無駄にして友達と散歩をしてつた。

フオオプス・ロバアトソンの『ハムレット』は、かれ自らも最もこれを得意とし、有識者側からも最も高く價値を置かれてゐる歐米の劇壇を通じての珍品である。併しながら、如何にそれが珍品であつても、私はそれを二度見たいとは思はなかつた。

『ハムレット』が世界の傑作だといふ事は事實である。併しながら、ハムレットの使

ふ詞が、もう吾々の使ふ詞でないといふ事も事實である。時代はもう舞臺で見る『ハムレット』よりも、本で讀む『ハムレット』に動かされるやうになつた。

併し、まだ舞臺の上のハムレットと雖も、決して新しいジエネレーションを絶ちはしない。吾々の時代には吾々の時代に應じて、又幾多の新しいハムレットが現れて來た。モスクワにはカチャロフのハムレットがある。伯林にはモイツシのハムレットがある。今から十五年前に新しいハムレットとして喧傳されたフオオブス・ロバートソンのハムレットも、もう吾々の目には古いハムレットの一つとなつた、私は品の好いクラシックを讀むやうな氣持で、この人の扮する丁抹皇子を見た。

『ハムレット』を二度見る事に氣は進まなかつたが、世界の演劇史に誌して傳へらるべき名優の最後の舞臺を見ずにはゐられなかつた。しかも當夜は長く記念として保存せらるべき特別なプログラムを總ての見物に頒つといふのである。私はこれも欲しかつた。

私はいつもの通りピットの客とならうと思つて、八時に始まるといふのを六時頃から出掛けた。私の下宿は可なりな場末であつたが、それでもチエアリング、クロスのチウブのステエションから潜り出て、ストランドの通りを東へ歩き出した時はまだ七時すつと前だつた。

ライシアムの角を曲がる。ここはタルタア・スコットの『アイリンホオ』で、値段は安いし、狂言は活動寫眞式と來てゐるので、いつもながらの繁昌である。少し坂を上がつて、キヤザリン、ストリートへ出ると、相變らず坂下の角の倫敦オペラハウスが、*Over here!* で、ピットの木戸口に「衆愚」の行列を作つてゐる。その行列を少し離れた往來に、いづれも汚ない烏打帽子を冠つて、いづれも破れた着物を着た、八つから十位までの男の子が三人、ずらりと一列に並んで、身體中の聲を振り絞つて、流行歌か何かを唄つてゐる。これは芝居好きな「衆愚」の行列から幾らかの喜捨に預らうとする芝居廻りの袖乞である。私の志すヅルリイ・レエンの大きな構へは、もう直ぐだら／＼

坂の上にある。

私は高を括つてゐた。いくら名優の一世一代でも、もう一つ劇場で二月半から打ち通してゐるのである。それに先週から、もう大分客足も薄くなつたやうだ。いくら最後の晩だからと言つて、さう大した事はあるまい。私はこんな事を考へながら、『ステエジ』の出る社の前まで来た。

大變な人である。可なり奥の深いピットの入口も、もう一杯に人が詰まつて、溢れ出た行列の尾は、坂の下の方まで續いてゐる。

フオオプス・ロバートソンが倫敦を終つてから二三年の間に、英吉利の田舎だの、亞米利加だの、方々お名残の興行をして歩く豫定の道順が示してある大きな地圖の張つてある角を曲がつて、ラッセル・ストリートの方のピットの入口へ出て見る。

ここも前の入口に負けない程の人である。この長い行列の一番終りに立つといふ事は如何にも心細い事である。いくらブルリイ・レエンが大きいからと言つて、ピットの椅

子には限りがある。私はそこに立つてゐる巡查に訊いて見た。

『どうです、這入れませうか。』

巡查は迎も駄目だらうといふ風に、苦笑をしながら首を横に振つた。

私はもう番號のある席を買ふより爲方がないと思つた。急いで又元の通りへ出て、丸柱の立つてゐる劇場の玄關を這入つた。併し、切符賣場にももう安い切符はなかつた。私はいつもなら四シル位で買へる席に、十シル以上拂はなければならなかつた。

玄關口の廣間にある長椅子に腰を掛けて、一時間近くもほんやり待つてゐると、漸く私達の這入る口が明いた。

私は第一番に飛び込んだ。そして直ぐ記念のプログラムを貰つた。プログラムの表紙は褐色の厚い紙で、真ん中にフオオプス・ロバートソンの胸像の寫眞版が張りつけてある。中にはこの名優の略傳がある、最後の夜の『ハムレット』の役割や場割が金で刷つた飾り縁に圍まれて出てゐる。お名残興行として演じた八つの役の寫眞が紫色の

網版になつて、八枚ついでゐる。今年のロイヤル、アカデミーに出てゐるジョージ・ハ
アコオト筆の素顔の寫眞と夫人ミス、ガートルウド・エリオットの寫眞も出てゐ
る。待ち構へてゐた程好い趣味のプログラムではなかつたが、それでも私はこの歴史
的に貴重なプログラムを貰つたのが嬉しく堪らなかつた……

見物はどん／＼這入つて來た。私が席へ着いてから二十分も立たない内に、この大
きな劇場は、爪も立たない程な大入になつて了つた。

最後の『ハムレット』が始まつた。大きいだけで内容のない背景が、綺麗なだけで
淺薄な背景に續く……

相變らずチャイコウスキイの『ハムレット』から選ばれたといふ莊嚴らしくて實は
力のないマアチが、繰り返しオオケストラから響いて來る……

相變らず下品な顔をした女王である。相變らずバツシヨンのない王である。相變ら
ず目の動かないオフィイリアである……

この間に立つて、相變らず著しい印象を吾人の腦裏に刻み込むものは、フオオプス。
ロバートソンのハムレットである。

品の好いかれの聲は、セロの哀哭を思はせる。輪廓の鮮明な、生き／＼したかれの
顔には、少壯學者としての丁採皇子の氣品と賢明とが溢れてゐる。優しくもなり深くも
なるかれの眼には、あらゆる情火と、あらゆる疑惑と、あらゆる心遣ひとがはつきり
と浮いて出る。

かれの微笑には決して苦い所がない。かれはボロオニアスに對しても、二人の幼友
達に對しても、決して嘲りの微笑を浮べない。かれは如何なる人をも明かるい微笑を
以て迎へる。

かれの禮讓は、何よりも吾人の心を引き附ける。かれは廷臣といふ廷臣に、一一上
身を曲けて挨拶をする。王に對し母に對する態度も、平素は殆ど少しの濁りもない恭
敬畏服の態度である……

六十一歳のハムレットは、始めて吾々の目の前に立ち現はれた瞬間こそ、少しは年も取つて見えるが（それも六十一とは逆も見えない）第一場よりは第二場、第二場よりは第三場と、段々と若い情火が燃えて来て、終には全く吾々と同じ年輩の人になつて了ふ……

最後の幕が来た——『ハムレット』の、そしてフォオオブス・ロバートソンの最後の幕が来た……

致命の痛手を負うたハムレットは、ホレエシオとオスリックに助けられて、今まで仇の領めてゐた玉座へよろめき登ると、黄金の笏を右の膝の上に構へて、うつとりと空を——「永遠の國の黄金の門」を——見詰める——

"I cannot live to hear the news from England;

But I do prophesy the election lights

On Fortinbras: he has my dying voice;

So tell him, with the occurments, more and less,

Which have solicited……"

汚辱の血の失せた唇から、苦惱の現世を逃れた清い聲が、香の煙のやうに細々と立ち登る……

ハムレットは震へる手を空にさし延べて、寂しい旅路の道連れを求めろが、もう「愛しい手」は何處にもない……

"The rest is silence"

見えない幻影を見詰めるながら、この夜は殊に意味の深いこの最後の一句を吐くと、膝の上に突いてゐた笏が前へのめつて、ハムレットはがっくりと首を垂れる……

ホレエシオが、クロオヂアスの頭から落ちた王冠を、死んだ友達の膝の上へ置くと、そこへフォオオチンブラスが部下の兵を連れて這入つて来る……ハムレットの死骸が楯の上に載せられて、四人の武士の肩に高く擔はれる……

幕が降りる。見物は氣違ひのやうになつて手を叩く。一度死んだ丁抹の皇子は、又生き返つて幕の前へ出て來なければならなかつた。オフィイリアに扮したフオオブス・ロバートソン夫人ガートルウド・エリオットも、衣裳を着換へて嬉しさうに出て來た。オオケストラからフットライトを越えて、花束だの花輪だの月桂冠だの丁抹式の旗だのが、後から後からと渡される。フオオブス・ロバートソンは引込んで出、引込んで出、引込んで出、幾度幕の前で頭を下けたか分からない。それでも拍手は止まなかつた——いつまでも止まなかつた。見物は老優に告別のスピーチを要求するのであつた。

芝居の臺詞でない詞が、芝居の時と同じ齒切れの好い調子で、ハムレットの装をした儂の老優の口から出始めた時、見物は始めて靜かになつた。

「今から殆ど四十年前、私は元のプリンス・オブ・エエルス座の樂屋から、危なかつしい階子段を降りて、始めて倫敦の御見物の前へ現れようと致しました。その時舞臺裏

にゐた大道具の一人は私の姿を見て「大變だ。ハムレットのお父さんのお化けが來た。」と申しました。」

見物が笑ふ。フオオブス・ロバートソンは一息つく。

「私はこれを聞いてがっかり致しました。何故なれば、私は既にそれより六年前、十四の年に一度ハムレットを勤めた事があるので、無論「そら、息子が來た。」と言はれるだらうと思つてゐたからです。」

「その時の芝居は實に不思議なものでございました。舞臺は當り前の家の奥の方の客間でした。役者の人数も無論足りなかつたので、私の妹などは、オフィイリアと慕掘りとを二役勤めました。亂暴なお客様達はオフィイリアが自分で自分の死骸を埋めるのを見て、大層お喜びになりました。」

見物が又笑ふ。フオオブス・ロバートソンは又一息つくと、少し皮肉な笑ひを口の邊に浮べながら、

『私共はその時この悲劇を幕ばかりの舞臺で演じました。即ち私共は既にその當時、昨今頗に唱道される沙翁劇の演出法に、先鞭をつけてゐたのかも分かりません。』

少数の見物が笑ふ、多少とも皮肉の分かつた人達の笑ひである。そして、井リアム・ボオエルやゴオジン・クレエグやグラン井ル・バアカアやマアチン・ハアエイなどに餘り同情を持たない人達の笑ひである。私は少し厭な氣がしたが、老優の微笑が如何にも明かるく和らかなので、直ぐ氣持が直つた。

『併し、それはもう昔の事です。今日の劇壇はその當時とはもう丸で違つたものになつて來ました。その當時舊プリンス・オブ・エエルス座にゐたバンククロフト一派には實際立派な先覺者がゐました。彼等は舞臺の前や後で今日諸君が想像される以上に立派な爲事をしたものでございます。』

少数の見物が拍手する。その當時の事を知つてゐる年寄連でもあらう。私は先代菊五郎の死んだ時、その遺子を自分の側に並べて口上を言つた團十郎が、猿若町時代の

感慨に耽つた詞の調子を、ふとこの時思ひ出した。

『技藝の標準はその時分から見ると、ずつとく高くなりました。作者もその時分から見るとずつと殖えました。さうして、作者は以前よりは進んだ階級の人々の心に直接に訴へるやうな題材を取扱ふ事が出来るやうにもなり、以前には逆も呼べなかつた智識の進んだ階級を見物にする事が出来るやうになりました。』

『最近十年の間に、倫敦の俳優興行主は著るしい進歩の跡を示して來ました。即ち、切符の賣高ばかりを考へずに、戯曲を舞臺の上のせる事が出来るやうになつた事です。勿論、切符の賣高は劇場にとつて重大な事の一つでありませう。併しながら、俳優興行主の第一の目的は、最上の戯曲を演出するといふ事になければなりません。劇場は殖えて來ました。俳優は殖えて來ました。競争は益激しくなる許り、標準は益高くなる許りでございます。』

老優は感慨に堪へないといふやうな目つきをして、暫く黙つてゐたが、やがて又平靜

な微笑に歸つて、

『さて、これは一家の問題でございますが、この度のお名残興行といふ意味の中にはミス、ガートルウド・エリオットを含まないのでございます。』

見物が手を叩くと、

『その御喝采は、夫たる者の耳に音楽よりも美しい響を齎します。彼女は遠からず再び倫敦の御見物の前へ現れる名譽を得る事でございます。』

老優は若い可愛い細君の爲に、聊か吹聴めいた口上めいた事を言ふ。

『私は私を生んで呉れ、私を教育して呉れ、そして幸にも不幸にも常に私を勵まして來て呉れた倫敦に向つてお別れを言ふ特權を得た事を、非常に喜んでゐます、殊にそのお別れをこの古い歴史のある劇場で述べる事が出來たのを光榮と存じます。私は心から希望致します。どうかこの貴い小屋だけは將來いつまでも古典劇の劇場にして置きたいものでございます。』

拍手。

『私は愈お別れを致します。けれども私は決して悲しいとは思へません。私は私に拂はれた貢物に對して、寧ろ喜び且誇つてゐます。私は唯希望致します。若い方達がこの町の偉大な傳統を承けて、常に眞面目な戯曲の發達を獎勵せられんことを。』

『吾々は恐れる必要はありません。如何なる物も舞臺の上の「話される詞」に手をつける事は出來ません。戯曲は常に吾々と一緒に在ります。他の形式を持つた娛樂が今にも吾々の周圍から壓迫して來るやうに言ふベシミストの詞などに耳を傾ける事はありません。如何なる物も戯曲を妨げる事は出來ません。戯曲は人類の存在する限り存在します。』

拍手。

『私はもうこれ以上諸君をお止め申しません。この瞬間は私にとつて偉大な瞬間です。私は詞以上それを誇りとしてゐます。この十週間かかる大入を續けて來たのに、ど

うして私は悲しめませう。この倫敦ロンドンの大きな劇場に斯くも大勢の方々が、私に別れを告げる爲に集まつて来て下さつたのに、どうして私は悲しめませう。吾が國王陛下が身に餘る名譽を與へて下さつたこの戯曲戯曲的な瞬間に、どうして私は悲しい顔をしてゐられませう。』

老優はこの數日前、國王の誕生日に戯曲家ジェエ・エム・バアライなどと一緒にサアを授けられたのであつた。

『淑女及び紳士諸君、私は皆様にお別れを申し上げます。ほんとにこれがお別れでございます。けれども私は今お別れの詞を述べたくありません。私は寧ろかう申し上げます——御機嫌よう。お休みなさいまし。("God bless you all and good night!")』

アア井ング以來の名優サア・ジョンストン・フォオプス・ロバートソンは、この優しい子供のやうな挨拶を残して、永久に倫敦の舞臺を退いた。私は「若い者に押されて行く年寄りの姿を見た。「もう私などはるないでも好いでせう」とでも言ひさうな悲しけ

な目の光を見た。老優の額に見た深い皺は、丁抹の皇子の額に見た同じものより、遙かに悲痛であつた。

老優夫婦は見物と一緒に「オールド、ラング、サイン」を唄ひ、「ゴツド、セエヴ、アウア、グレエシアス、キング」を唄つた……

大きな防火幕が舞臺と客席とを全く隔絶して了つても、まだ見物の大部分は名残を惜んで芝居の中に残つてゐた。

デキスン嬢の死

もう倫敦の逗留にも飽き飽きして來ました。全體こんなに長くゐる筈はなかつたのですが、見たいものや聞きたいものが、それからそれと出來て來るのでつい／＼こんなに長くなつて了つたのです。おそくも五月の末には立つ筈だつたのを、又二週間ばかり延ばす事にしたのも、詩人イエエツとグレゴリー夫人に率ゐられた愛蘭國民劇協會が、思ひがけなくスロオン、スクエアのコオト、シアターへやつて來たからです。この劇團はついこなひだまで亞米利加へ行つてゐたので、今年——一九一三年——はとも見られまいと思つて、實はもう諦めてゐたのです。

この劇團は或一つのプログラムを月曜火曜水曜の三晩と、これに水曜のマチネエを加へて、都合四回やると、木曜の晩から又プログラムを新しくして、金曜土曜と、これに土曜のマチネエを加へて、都合又四回同じものをやるといふ風にしてゐますから、

The
Suffragette
The Official Organ of the
Women's Social and Political Union

Edited by Christabel Pankhurst.
No. 11. Vol. 1.
FRIDAY, JUNE 11 1913.
Price 1d. Weekly.



IN HONOUR AND IN LOVING, REVERENT MEMORY
EMILY WILDING DAVISON.
SHE DIED FOR WOMEN.

"Glad to see this in your issue. It is the first time that the 'Suffragette' has ever been published on a Friday."

私は一週間に二度しかコオトへは行かないわけなので（もう私はこちらへ来た初めのやうに、同じ芝居を二度三度と見る根氣がなくなつてゐます）、その間のつなぎをどうかしてほんやりせずに過すごさなければならぬ事になりました。私はこの短い旅行を、一日でも無意味に暮らすのが、惜しくて惜しくて堪らないのです。

併し、倫敦には一向刺戟的な事がありません。誠に住み心地のよい、人氣の穩かな所ですが、私達青年の心を興奮させたり感激させたりするやうな事は一向ないのです。總てが眠つてゐます。總てが死んでゐます。私のさういふのは、ひとり藝術界の事ばかりではありません。政治でもさうです、會社の事業でもさうです、毎日繪入新聞で見る市井の出來事でもさうです。

さういふ中で、たつた一つ活氣のあるのは、御存じの Suffragette です——男子と同じ參政權を得ようとする婦人達の運動です。この運動の趣意は誰が見ても立派なもので、政府もいつかはこの婦人達の言ふ通りにするには極まつてゐるのですが——も

う時間の問題だけになつてゐるのですが——サラフジエットの連中は、それを便々と待つてはゐられないと言ふのです。もう呉れなくても好い、貰はなくつても好い。自分達が持つべき正當な権利なのだから、自分達の「力」で取つて見せると言ふのです。これが所謂 Militant Suffragette といふ奴で、随分亂暴をして歩きます。こなひだも私の友人の研究に通つてゐる Kew Garden といふ有名な植物園へ行つて見ますと、そこにあつた Pavilion なども、サラフジエットに焼かれて了つたのださうで、茶亭はやむを得ずテント張りで營業をしてゐました。總硝子の温室などもいつ何時やられるか分からないので、みんな冷や冷やしてゐるのだといふ事です。つい先達もロイヤル、アカデミーの展覽會に火をつけて、あすこの繪をみんな焼いて了はうと企てたサラフジエットがあります。議會の傍聴席へはひり込んで、爆烈彈を首相にぶつけ損なつたのがあります。こんな風ですから、近郊にある離宮なども、この頃は唯庭を見せる位なもので、寶物の置いてある奥殿などへは一切人を入れない事にしてゐます。さうい

ふ亂暴をするサラフジエットは、無論直ぐ捕まへられて、牢屋へ入れられます。ところが、これが又 Hunger Strike といふ事をやつて、一切獄中で食事をしません。さうかと言つて、干し殺してはならないから、獄丁が無理に食事をさせようとする、所謂 Forcible Feeding で、これが又サラフジエットの怒りを招くといふわけです。バナナド・シヨオなども、これは牢屋へ入れるといふ上に、無理に食事をさせるといふ二重の刑罰を與へるものだと言つて、サラフジエットの憤慨に味方をしてゐます。かう言つて來ると、サラフジエットの連中は無暗と恐ろしい、鬼のやうな女ばかりの集まりのやうに見えますが、事實は決してさうではありません。日本の所謂「新しい女」などより——かう言つては日本の進んだ婦人諸君に禮を失するかも知れませんが——ずつと愛嬌もあれば、色氣もある、優美な婦人達の集合なのです。第一、倫敦のサラフジエットには大分女優がはひつてゐます。今はもう舞台を引いてゐますが、有名なエレン・テリー、その妹のマリオン・テリー、ゴオツン・クレエグの妹エヂス・クレエグな

どは勿論、『ビイター・パン』で有名なボオリン・チエエス、ついこなひだまで、ここで引退興行をやつてゐたフオオブス・ロバートスの妻君のガートルウド・エリオット、ただその外にも澤山ありますが、かういつた美しい人達が、仲間になつてゐると聞いただけでも、既にもう荒らくしい野蠻な感じなどはしないではありませんか。

愛嬌と言へば、いつぞやもこの連中が隊を組んで、大通りの商店のシヨオ、井ンドオの硝子をハンマアで毀して歩いた事があるさうですが、その時なども、成るべくふだん女の客をお得意にしてゐる——即ち婦人に對してあんまり苦情の言へない——化粧品屋や帽子屋のそれを毀して歩いたといふから面白いぢやありませんか。ところが、化粧品屋や帽子屋の方でも、又それを知つてゐて、破壊を未然に防ぐ爲に、抜け目なくサフラジエットの機關新聞といふ機關新聞に大きな廣告を奮發して、精々歡心を得るやうに努めてゐるのだといふから、更に面白いぢやありませんか。

ハイド、バアクの諸所で毎日曜催されるこの連中の車上演説も、一度聞きに行つて

見ましたが、中々愛嬌があつて面白いものでした。私の見た車の上には、思ひの外年をとつた婦人だの、思ひの外年の若い婦人だのが、三四人乗つてゐました。そしてこの三四人が代る／＼立つて演説をするのです。丁度私の行つた時は、まだ年の若い利口さうな目をした、身なりの小さつぱりとした、可なりな美人が立つてやつてゐました。論旨は大抵機關新聞に毎週繰り返される社説と大して違ひはありませんでしたが、その懸命さは可なりに私を動かしました。然るに演説車を取り巻いてゐる男達は、いづれも職人か商店のクラアクといった無知な連中で、日曜日の慰み半分に聞いてゐるのだから堪りません。頓狂な聲でノオを叫んだり、無暗と長く手を叩いたり、隊を組んではやり歌を唄つたりして、演説の邪魔をするのです。併し、女辯士は少しも怒つたやうな色を見せないで、笑ひながら、その人達に "You, musical gentlemen!" などと呼びかけるのです。聴衆の男の中には、時々だみ聲をあけて随分な愚問を發する手合があります。美しいサラフジエットはどんな愚問をも決して侮蔑しないで、一々親切

に解決するのです。私はこの態度を快く感じました。

かういふわけですから、私も私の友人のT君も、サフラジエツトが大の最負で、土曜日の午後にはきつとチエアリング、クロスへ出かけて行つて、この運動の週刊機關新聞を、成るべく若い婦人の手から買ふのを常としてゐます。

併し、私達がこの運動の彌次馬たる事は、決してハイド、バアクの職人達と選ばないのです——私達がこの國の政治運動に直接の利害關係を持つてゐない事は、明らか事なのですから——ただ私達の彌次は彼等の彌次に比してずつとおとなしくもあれば温かであるだけが違つてゐるのです。併し、彌次はやつぱり彌次です。傍觀者はやつぱり傍觀者です。私達は芝居か踊でも見物してゐるやうな氣で、サフラジエツトの運動を見物してゐるのです。

ところが、ついこの頃、傍觀者が傍觀者でゐられなくなるやうな、恐ろしい事件が起りました……

ダアビー競馬と言へば、世界でも有名な競馬ですから、名前は既に聞いてお出でせう。毎年五月の末か六月の初めの火曜日から金曜日にかけて、ここから十六哩程離れたエブソムといふ田舎で、夏期の大競馬が催されますが、その内水曜日のダアビー、デエは、中でも大事な日なので、倫敦中の人氣は悉くこれに集注されると言つても好い位です。職人などには一年中の貯蓄を携へて行つて、幾枚かの馬券に運命の限りを托して了ふのがあります。貴族や富豪でも、巨萬の財を一度の賭に失ひ悉して、自殺をするものさへ間々あるといふ事です。勿論、世界の各地から旅客が集まつて参ります。巴里からは特別列車が仕立てられます。ステエシヨンの前のホテルなどは、さういふ客でどれもこれも満員といふ繁昌です。

今年はそのダアビー、デエが丁度六月の四日に當りました。私は丁度身體の明いてる日だったので、例のつなぎに、ふとエブソムへ行つて見る氣になりました。それが

らT君を誘ひますと、T君も永年倫敦にゐるが、まだ一度も行つて見た事がないからといふので、汽車の案内旁一緒に行つて呉れる事になりました。

一體私は自分ではやりませんが、人の賭事を見てゐるのは大好きで、日本でも「馬券時代」にはよく目黒や川崎へ見物に出かけたものです。三分か五分の間の運命で、何百圓何千圓といふ金を、一度に儲けたり損をしたりして、俄に得意の絶頂に登つたり俄に失意のどん底へ落ちたりする人の顔を見るのが、何とも言はれず愉快なのです——太古がらの人間の本性が、一条をも留めずひん剝かれて、まつ裸に暴露されて了ふのを、一種残酷な「共鳴」を感じながら見るのが、何とも言はれず愉快なのです……

ダアビー、デエの当日は、空の高く晴れた、埃の立つ日でした。エブソムのステエシヨンから競馬場へ行き着くまでの光景は、嘗て私が目黒や川崎で見た光景と少しも違ひがありませんでした。大勢の男や女が村の道を一ぱいにして、頭から埃を浴びながら、みんな同じ方向に押し寄せて行くのです。人々の眼はみんな或期待に血走つて

額には欲望の汗が汚なくにじみ出てゐます。その人込みの中を、金持の自動車や貴族の馬車が横切つたり駆け抜けたりして行くのです。併し、馬車に乗つて行く連中の目つきも、田舎道をボク／＼歩いて行く連中の目つきも、目つきに變りはないのです。

——私達もそのボク／＼連中に交つて、砂ほこりを浴びながら歩いたものです。

やがて競馬場へ着くと、もう何千といふ人が集まつてゐます。私達は成るべく入場料の安い所へはひらうとしましたが、時間が少し遅れた爲に、もう何處も満員ではひれませんが——散々あつちへ行つたりこつちへ行つたりした揚句、とう／＼思ひ切つて、

Grand Stand へはひる事にしました。Grand Stand の入場料は一人一磅で、日本なら馬券が二枚買へる値段でしたが、ここならまだ明いた席もあるといふ事ですし、國王陛下の玉座の近所で見られるといふのが有難いので、とう／＼奮發して、ここへはひる事にしたのです。

併し、はひつて見るとやつぱりここも一杯で、到底棧敷の椅子に腰をかけて、ゆつ

くりと見物する事などは出来ないのです。唯棧敷の下の芝生が、外の等級の席よりは稍透いてゐるので、立つてなら見られるといふだけの事でした。尤も椅子に坐れたとしても、とても坐る勇氣はなかつたらうと思ひます。何しろここは最上級の客ばかりが集まる場所なのですから、男も女も流行と粹の限りを盡した服装をしてゐるのです。男は大抵色變りのモオニングにシルクハットで、肩には双眼鏡の黒い皮の紐をかけ、薄手な皮の手袋をはめた手には銀金具のついた細い眞つ直ぐなステッキを突いてゐます。靴は大抵黒のエナメルで、ズボンの下には薄色の短い隠し脚絆をしてゐます。さういふ中に、モオニングに山高帽で手袋なしといふ倫敦では餘り見られない田舎めいた風俗で立ち交るといふ事は、如何に厚顔な私達でも少しは氣が引けるのでした。併し、私達の芝生は競馬を見る場所としては、確に第一の場所でした。決勝點は直ぐ目の前にあります。出馬の掲示板もまともに見られます。小高い岡の上なので目黒の三倍もあらうといふ廣い競馬場も、殆ど隅から隅まで洩れなく見渡す事が出来るのです。

日本ではコオスの中の圓内へは係りの者しか入れませんが、ここではそこが一番安い場所になつてゐるらしいので、労働者らしい服装をした連中が何千人となくその中に集まつてゐて、遠くから見ると、まるで蟻かなんぞのやうに眞黒になつて蠢めいてゐるのです。その中には小屋がけの飲食店や、急拵への運動機械などが出張つてゐて、群集の中で子供がブランコをしてゐる光景などが、遠くから小さく見えるのです。やがて競馬が始まりました。馬券は日本のやうに○印のばかりで賣るのではないので、政府の許可を得た中賣りが大抵二人宛組んで、私達のゐる芝生のそこそこで、歩きながら、馬券を賣つてゐるのです。一人が大聲で出馬の名を呼んでゐます。一人は客から金を受け取ると、直ぐそれを上着の横の衣兜へ突つ込んで、馬券を渡しながら大きな帳簿へ鉛筆で何か一寸記します。それだけの事でよく間違ひが起らないものだと思ひますが、これで決して間違ひが起らないといふ所に歴史的な英吉利一流の公德 (223)

の誇りがあるので——見てみると、小さな札を出して馬券を買ふ人はありません。大抵は五磅ノオト（五十圓札）を幾枚か重ねて、大丈夫だといふ馬を買ふのです。勿論、中には大穴を豫期する人もあるにはあるやうですが、まあ九分が九分、勝目疑ひなしといふ馬に出来るだけ多くの金をかけるといふ風に見えました。

私は勿論そんな事をするだけの金を持つてゐませんでしたし、自分でやつて見ると興味もありませんでしたから、唯番組と首つ引きで競馬の勝負ばかりを見てゐました——一勝負済む毎に五磅ノオトの大きな束が、あつちへ行つたりこつちへ來たりしました。仲賣りも容も、まるで唯の紙のやうに貴重な紙幣を引つ掴んで、これをやつたり取つたりするのです——私は人間の慾の頂上が、却つて貴重なものを粗末にする光景を目のあたりに見ました。紙幣も金貨もここでは何の權威がないのです。唯あるものは人間の慾です、人間の賭博的本能です……

何回目かの競馬でした。これには國王の持馬が出るといふので、それが大した人氣でした。人々は國王の持馬がどれもこれも、弱くていつも負けてばかりゐるのを知つてゐながら、主權者への諂ひからやつぱりその馬を買ふのです——この時出たのは「Tattermer」といふ馬でした。

『キングの馬には時々女騎手が乗るよ。』

私はT君のかう言ふのに興味を持つて、番組と騎手の服の色とを見比べましたが、生憎その時王の馬に乗つて出たのは男の騎手でした。

王の馬は初めの内は可なり勢よく走りましたが、直ぐ勞れて來て、いつの間にか目に立つやうな位置にゐなくなりました。

眞黒になつて走る馬の群が、丁度私の立つてゐる芝生から左の方に見える「Tattenham Corner」にかかつた時でした。馬の一つが躓いて倒れたかと思ふと、騎手が眞つ倒に地面の上へ落ちました。埒の内からも外からも、堀を潜りぬけて大勢の人が飛び出して

來ました。馬の姿も騎手の姿も、忽ち眞黒な群集に圍まれて見えなくなつて了ひました。やがて Ambulance がレエス、コオスへ引き出されました。

「騎手が落ちたんだ。」

「死んだのかしら。」

「死にはせぬが、頭をぶつて氣を失つた。」

こんな會話が忽ち私の周圍に起りました。私は嘗て松戸で見た悲惨な騎手の落馬や目黒で見た残酷な負傷馬の銃殺だのを思ひ出して、妙な氣持になつてゐますと、又こんな會話が耳へはひつて來ました——

「馬がひとりで躓いたんぢやない。サフラジェットが埒の中から飛び出して來て、馬の手綱に飛びついたんだ。」

「王の馬に飛びついたんだ。」

「王の馬をねらつて飛びついたのか。」

「さうだ。」

「そしてそのサフラジェットはどうしたのだ。」

「無論死んだらう。」

「どうしてそんな馬鹿な事をしたんだらう。」

「王の注意を引く爲だ。」

私は場所が離れてゐたので、はつきりこそは見ませんでした。兎に角この恐ろしい事件の前に偶然立つてゐたのは事實でした。

或人はサフラジェットの勇敢を賞しました。或人はサフラジェットの狂的行爲を嘲りました。併し、私はどつちの氣持にもなれませんでした。私は唯、今まで彌次でゐたのが、急に彌次でゐては濟まないやうな氣がして來ました……

私は舞臺の上で氣を失つて倒れる俳優を見た時のやうな氣持がして、甚しく「遊び」の氣分をそがれました……私は歸りしふるT君を促して、あとの勝負は見ずに競馬場

の外へ飛び出してしまいました。

その晩、私は倫敦の或寄席で、早くもその日の出来事を活動寫真で目のあたり見ました。寫眞はタツテンナム、コオナアに据えつけてあつた器械が、偶然とつたものだといふ事でした——多くの馬が非常な勢で走つて來ました。突然埒の中から白いものが飛び出して來て、いきなり馬の一つにからみつくると、馬は直ぐ倒れました。多くの群集が崩れを打つて出て來ると、忽ちレス、コオスを眞黒にしてしまいました……

その日の夕刊。明るる日の朝刊。私は新聞といふ新聞を買ひ集めて、事件の真相を究めようと思いました。

馬はその時一時間四十哩といふ早さで走つてゐたのでした。王の馬は少し遅れて、稍外輪を走つてゐたのです。前からその覺悟で來てゐたらしいサフラジエットのデピスン嬢は、王の馬にきつと目を注ぎながら、埒を潜つてコオスへ飛び出すと、いきなり身

を躍らせてその手綱を握まうとしました。併し、それは無駄でした。馬は婦人を蹴倒すと自分もバランスを失つて倒れました。騎手も片足を鎧に引つかけた儘落ちました。馬は怒つて、倒れた儘尙したたかに婦人を蹴りました。これは實に一瞬間の出来事でした。やがて馬は立ち上がりましたが、婦人と騎手は地面の上に倒れた儘になつてゐました。二人はアムビュランスに載せられて、直ぐとエプソム病院へ送られたのです。一説に依ると、デピスン嬢が倒れると同時に、サフラジエットの旗が埒の中で揚がったといふ事です——これで見ると總ての事が準備されてゐたやうに見えます。

事件の起つた場所の直ぐ前に、愛蘭の若い劇作者セント、ジョン・アア井ンが立つてゐたさうです。かれは或新聞の主筆にその光景を書いて送つて、「この出来事はひどく群集を悲しませた。」と言つたさうです。ハイド、バアクの彌次馬も、この悲壯な事件を目の前に見ては、膽を冷やしたに違ひありません。

併し、デピスン嬢はなぜこんな事をしたのでせう。その理由は簡單にして明白です。

「數週間前に、議會の開院式へ臨まうとする國王を道に要して、五人の婦人が直訴を企てた。その結果として、かれらは獄に投ぜられた。」

「六月四日の水曜日に、一婦人がその計畫を再びした。かの女は終に直訴を遂げたのである。併し、かの女はそれが爲に貴重な生命その者を犠牲にした。」

「世界最大の競馬に於いて、一婦人が如何にして國王の馬を留めたか、如何にして致命の傷を得たかといふ物語は、文明世界のあらゆる隅々まで到達した。」

「一千九百十三年のダアビー、デエが記憶せらるる限りは、愈やし難い悲痛を以て、この英雄的行爲が聯想されるであらう。」

「エミリー・井ルデング・デ井スンは、二十世紀にも理想の爲には喜んで生命を擲つ人間のある事を證據立てた。」

サフラジエットの或機關新聞には、こんな事が書いてありました。デ井ス嬢は多くの婦人の命を救ふ爲に、一人の婦人の命を馬に踏み殺させたのです。デ井ス嬢は

自分達の主義の偉大な事を社會公衆に知らせる爲に、自分の命を掲示板にしたのです

.....
デ井ス嬢は婦人參政運動の爲に、これまでもう八回程牢屋へはひつてゐます。

第一回に捕まつたのが千九百九年の三月三十日で、議會妨害の爲に一ヶ月の禁錮。第

二回が同じ年の七月三十日で、ライムハウスの議事妨害の爲に一ヶ月の禁錮。第三回が同じ年の九月四日で、マンチエスタアのホワイト、シチイで石を投つた爲に一ヶ月。

第四回が同じ年の十月二十日で、ラドクリッフで石を投つた爲に一ヶ月。第五回が千九百十年の十一月十九日で、下院の窓を毀した爲に一ヶ月。第六回が千九百十一年

の十二月十四日で、エストミンスター市の郵便箱に火をつけた爲に一週間。第七回が千九百十二年の一月十日で、ホロエエの郵便箱に又火をつけた爲に六ヶ月。第八回が同

じ年の十一月三十日で。ロイド・ジョオジと間違へて、或浸禮教會の牧師をアバアゲン停車場で襲撃した爲に十日間。その外にも一度有名なバンカアスト夫人と一緒にやは

り議事妨害で捕縛された事があります。

併し、デ井スン嬢はいつでも例のハンガア、ストライクをやつて、大抵は五日か六日、早い時は二日半位で牢屋を出て了つてゐます。中でも有名なのは、マンチエスタアのストレンジエ監獄でそいつをやつた時で、嬢は二つの板張りの寢臺を戸口の所へ立てかけて、靴だの腰掛だのブラシだのを楔にしてその上にちつと坐つてゐたといふ事です。獄丁はどうしても戸を明ける事が出来ないで、窓を毀して、そこからホオスを嬢に向けましたが、それでも嬢は寢臺にかじり着いてゐて離れなかつたといふ事です。かうして、嬢は直ぐ放免されたのです——かういふと、デ井スン嬢はひどく剛健な體格でも持つてる人のやうに見えますが、寫真を見ると、如何にも優形な品の好い婦人です。嬢はオックスフォオドの出身で倫敦大學の名譽學士まで持つてゐるのです……………

國王の馬に頭を蹴られたデ井スン嬢は、氣を失つた儘エプソム病院へ擔ぎ込まれました。王室外科醫學校の副校長マンセル・ムウラン氏は總ての爲事を放擲して、嬢の生命を取りとめようと、三日の間努力の限りを盡しました。金曜日に行はれた手術は、可なりな効果を齎しましたが、その後二日生きてゐたといふだけで、嬢は終に意識を回復せずに、日曜の午後に死んで了ひました。

女王陛下からは幾度となく慰問の使がエプソム病院へ來たといふ事です……………

デ井スン嬢の葬式は六月の十四日に行はれる事になりました——私はそれを見る爲に又出發を延ばしました。

當日、私は又T君を誘つて、ハイド、バアクの近所まで出かけました。大層な人出で、何處へ立つても中々よくは見られさうもなかつたのを、騎馬巡査が「道順變更」を告げて通つたので、大分人が薄くなつたところへ、やつぱり葬列は豫定通りの道をとつて

來たので、幸にも私達は一番前で見物する事が出来ました——（234） 巡査達はその筋の達し
で、群集を散らす爲に、わざと嘘をついて歩いたのです。

一時半か二時頃には来る筈の葬列が、三時頃になつて漸く來ました——保釋中のバ
ンカアスト夫人が帷をおろした馬車の中に隠れて、デ井スン嬢の棺を送らうとしたの
が、刑事の知る所となつて差し留められたりなどしたので、豫定の出棺が一時間も遅れ
たのです。

葬列は幾組かに分かれて來ました。一番初めには、十字架の後に坊さん達がついて
來ました。その後から三列に並んだ娘達が、みんな白い着物を着て、一人一人月桂冠
を手にして來ました。その次ぎに紫の旗が來ました——「戦へ、神は勝利を與へむ」
と英語で書いてあります。それから又白い着物を着た娘達が十二列になつて、みんな
月桂冠を手にして來ました。

その次に樂隊が來ると、續いて倫敦の會員がみんな黒い服を着て、一人一人紫のあ
やめを手にして來ました。

それから又樂隊が來ると、續いてみんな紫の着物を着た倫敦の會員が、一人一人牡
丹の花を手にして來ました。

又樂隊が來ると、續いて白い着物ばかり着た倫敦の會員が、マドンナ百合を一人一
人手に持つて來ました。

又樂隊が來ると、今度は「思想は出でぬ、その力はもはや眠る事能はず。勝利、勝
利」と英語で書いた旗が來るのです。その旗の下に立つて來るのが、所謂ハンガア、
ストライカアで、いづれも瘦せた顔色の悪い婦人達ばかりです。月桂冠をのせた馬車
に續いて、牧師や坊さん達が來ると、「友の爲におのれの命を捨つるより大なる愛はな
し」と書いた旗が來て、その次にデ井スン嬢の筒人的な友人が續いて來ました。

その次ぎが黒い天鷲絨で蓋はれたデ井スン嬢の棺で、棺の後に親類がついて來まし
た。續いて「Dulce et decorum est patria mori」と書いた旗が來て、その次に又ハン
（235）

ガア、ストライカアがやつて来ました。それから又月桂冠をのせた車が来て、續いて「命を失ふ者は命を得む」と書いた旗がやつて来ました。それに續いて女醫や女學生が學校の制服でやつて来ました。

又樂隊。白い著物を著てマドンナ百合を携へた地方會員。又樂隊。紫の著物を著て牡丹を持つた地方會員。又樂隊。黒い著物を著て紫のあやめを手にした地方會員。又樂隊。花を持つた諸種の團體。それから又樂隊で、あとは一般公衆といふ順序でした。葬列はピカディからシャツベリイ、アエニウを通つて、キングスクロスのステエシヨンからデ井スン嬢の故郷へ送られるのです……………

私はこの美しい葬式を見て、愈々サフラジェットが好きになりました——私はもう彌次でなく、詩人口オレンス・ハウスマンのやうに、親身になつてこの運動が助けたくなりました。

僧 院 行

僅か三年前の事ですが、記憶は甚だおほろけです……私はゆうべ見た夢を思ひ出すやうに、ほつりほつりと書いて行くより外に爲方がありません。

北歐六ヶ月の旅程を終へて、私はもう一度露西亞へ這入りました。普通なら道を変へて歸る方が、變化があつて面白いのですが、私はどうしてもそれが出来ませんでした。

露西亞の舊都モスクワは勿論歐羅巴のどの都より美しくはありませんでした。家も低うございました。道もどこほこしてゐました。モスクワの市民は歐羅巴のどの市民よりも典雅ではありませんでした。服装にも東洋式の蠻風がありました。容貌にも髯むくぢやらかな恐い目が多うございました。併し、私はどうしてもモスクワを忘れる事が出来なかつたのです。寺の鐘の音が私を呼び寄せたのでもありません。橋



の鈴の音が私を呼び寄せたのでもありません。雀ヶ岡が私を呼び寄せたのでもありません。クレムルが私を呼び寄せたのでもありません。唯「モスクワ」が私を引きつけたのです。モスクワの何から何までが私をもう一度呼び戻したのです。

私は荷物だけを亞細亞へ走らせて、體だけモスクワへ降りました。もう七月も半ば近くでした。

寒さのないモスクワ。雪のないモスクワ。芝居のないモスクワ——それはその年の初めの冬に見たモスクワとは、似ても似つかぬ程寂しく且汚ないものでした。併し、モスクワはやつぱりモスクワです。「冬」の化粧をしたモスクワの忘れられなかつた私には、「夏」の眞裸なモスクワもやはり懐しかつたのです。

私はステエションを出ると、直ぐ辻馬車をトエルスコイ、ブウルワアルへ走らせました。そして、行きに世話になつたK氏のところへ、又歸りも厄介になりに行きました。K氏夫婦は、私を實の弟か何ぞのやうに歓迎して呉れました。

その晩——着いた日の晩——食事が済むと、K夫人は突然私にかう言ひました。

「あしたは土曜日ですから、みんなでZゴオロドといふ田舎にあるモナステリイへ一晩泊りで出かける事になつてゐますが、あなたもお勞れでなければ一緒に入らつしやいませんか。露西亞の夏の田舎を見て置くのも何かの参考になりませう。」

私は思ひもかけない幸福に出會つたやうな氣がしました。

「願つてもない事です。是非お供致ませう。併し、モナステリイといふのはお寺の事ですか。」

「さうです。僧院の事です。夏になると、坊さんが僧院を開放して、都の人を泊めるのです。坊さんが宿屋の番頭になつたり料理番になつたりするのです。それが變つてゐるといふので、随分大勢の人が都から行きます。中には夏中滞在する人もあるので、土曜日は殊に客が立て込みますから、私どもではもう電報を打つて、部屋をとつて置いて貰つたのです。」

「へえ。それは面白さうですねえ。お寺が宿屋をするなどは露西亞式で面白いと思ひます。是非お供致ませう。」

私はもう一度賛成して、明るる日を樂しみに、その晩は早くから床へ這入りました。

もう「白夜」に近い時分でしたから、勿論外はまだ明かるかつたのです。それでも、私は一生懸命に寝つかうとしました。

明るる日の朝、吾々は何とかいふステエションから汽車に乗りました。一行はK氏夫婦と、K氏の店に使はれてゐるF氏と、副領事のN氏と、それから私です。F氏は冬來た時、K氏の家のかるた會で一度會つてゐましたが、N氏には今度が始めてです。氏はつい近頃ウラヂオストツクから轉任して來られたばかりだつたのです。

汽車は恐ろしく窓の高い、薄暗い、冬向きの Stata Car——露西亞語で何と言ふか知りません。政府の汽車です。シベリアでは例の Wagon lit と區別する爲に、吾々は英語でかう言ふのです——で、あまり愉快な感じはしませんでした。

汽車が動き出すと間もなく、車掌が吾々の切符を調べに來ました。大學生の制服と少しも違はない緑色の服を着た、まだ年の若い男です。

『内地の車掌は大學生と同じ制服を着てゐるのですね。』

私がかう言ひますと、K氏は軽く笑ひました。

『あれは大學生なんだ。車掌ぢやないんだ。夏になつて學校が休みになると、金のない大學生が内職に汽車の切符切りをやるんだ。これも君のよく言ふ「露西亞式」さ。とても日本などでは見られない圖さ。』

私は暫く返事が出来ませんでした。平氣で汽車の切符切りを内職にする露西亞の大學生。而も制服を着た儘でそれをやる露西亞の大學生。それを許してさせる大學——さういふものが私には一寸理解が出来ないのでした。

併し、さう思ふのは狭こましい、規則づくめな、見え坊な日本の學生の考へで、「露西亞」といふ大きな、ゆつたりした、徹底した國を思ふと、その位な事は何でもない

やうな氣がして來ました——私は寧ろ金の爲に、愉快に身を卑しくしてゐる露西亞の大學生が慕はしくなつて來ました。

汽車は一時間か二時間すると、或野中の小さなステーションに着きました。

『さあ、來た。ここで降りるのだ。』

と、K氏に言はれて、みんなと一緒に汽車を降りりましたが、さて一體モスクワからどういふ方角へ何里ぐらゐ來たのか、一體ここは何といふステーションなのか一向そんな事は知らないのです。私は唯みんなのするやうに身を任せてゐました。

このステーションでは私達の外にも、都の人らしいのが大分降りました。みんな僧院行きらしいのです。五六臺待ち合せてゐた田舎の馬車は忽ちみんな塞がつて了ひました。

いづれも小さな汚ない馬車なので、私達は二臺に別れて乗る事になりました。併し、賃銀が折り合はないかして、中々出發しません。F氏は髻むくぢやらな田舎の馭者と頻

に何か論じ合つてゐます。K氏は「日本人だと思つて馬鹿にするな。俺はこれでも十年から露西亞にゐるのだぞ。」といったやうな態度で、その優しい目に冷笑を含ませながら、時々何か馭者に向つて皮肉を言つてゐる様子です。その内に、やつと値段が出たたと見えて、二人の馭者は二臺の馬車に別れて乗りました。前にはK氏夫婦が乗りました。後には副領事とF氏と私とが乗りました。

馬車は廣い野原の廣い道を、ガタクリガタクリと走り出しました。シベリアの汽車の窓から見たやうな、廣い廣い「露西亞」です。畑らしいものも見えなければ、山林らしいものも見えない、唯荒蕪たる原野です。併し、私はさういつた廣い土地を、汽車の窓からこそ飽きる程見て來ましたが、まだ實際歩いた事はないのです。ですから、唯見て何の味もないやうな野原も、私にとつては深い深い興味がありました。

暫く行くと、踏切の横木の長いやうなものが、廣い往來を横に切つてゐます。そして、その直ぐ側に小さな番小屋らしいものが立つてゐます。馬車はその木の前まで來

るとびたりと留まりました。すると、番小屋から眞赤なルバアシカを着た百姓らしい若い男が出て來ました。K氏は馭者に教へられて、これに何か拂つてゐるやうです。

『どうしたのです。』

私がかうF氏に聞きますと、F氏は笑つて、

『道路税を取られるのです。』

『驚きましたね。村で取るのですか。』

『村で取るのです。村で作つた道ですから。』

F氏の話に依ると、人間ばかりでなく、馬は馬、車は車でみんな通行税を取られるのださうです。

赤いルバアシカはK氏から金を受け取ると、嬉しさうに笑ひながら、横木の片端を押さへました。不細工な長い横木が、斜めに高く空へ上がると、馬車はその下を潜つて村へ這入りました。

百姓家が広い道端に、ほつりほつりと離れて立つてゐます。いづれも床の高い入口に段々のある、窓の縁に東洋風の彫刻のある丸木づくりの家です。私は直ぐと『闇の力』の舞臺を思ひ出しました。テートル、リイブルが巴里で始めてこの芝居をした時の寫眞に依ると、アントアヌは今私が道端で見ているやうな百姓家と全く同じ家舞臺の上に見せてゐます。モスクワの美術座がこの芝居をやつた時の寫眞にある、茅葺屋根の納屋のやうなものも、その通りなのが時々道端に見られます。茅葺屋根は日本の田舎にあるのと全く同じですが、唯細い木を斜に揃へて、所々に押さへにしてあるのが違ふだけです。下はみんな土間です。

『夏になると、百姓はああいふ納屋の中で、藁の中に寝るのです。草を刈りに野らへ出る連中は、一日働いて、日が暮れると、その儘男も女も一緒になつて外へ寝て了ふのです。風俗が亂れるのも當り前ぢやありませんか。』

副領事のN氏はかう説明しました。私はもう一度『闇の力』の事を思ひました。今

度は舞臺ではありません。内容です。あの陰惨な、同時に人の心を射ぬくやうな強い光明のある内容です。

馬車は村を離れると、又廣々とした野道へ出ました。何處で道が高くなつたのか知りませんが、前よりは一層廣い眺望です。晴れ晴れとした青い空。何とも言へず調子の柔かな青い草。露西亞の夏は、日本の春にも増して、私達の氣持を浮き立たせま

す。突然八つか九つ位の男の子が三人、往來へ飛び出して来て、私達の馬車を追つかけ始めました。みんな汚ないルバアシカを着て、帽子も冠らず、足も跣足なのです。

『あれは金が欲しくて私達の馬車を追つかけるのです。けれども、露西亞の子供は決して金を呉れとは言ひません。唯、黙つて馬車を追つかけるのです。いつまでも黙つて追つかけるのです。金を呉れるまでは、一井ヨルストでも二井ヨルストでも黙つて附

いて來ます。まあ見てゐて御覽なさいまし。』

F氏はかう言つて、私に説明しました。私は如何にも「露西亞」らしい話だと思つて、少し殘酷だとは思ひましたが、黙つて見てゐました。子供達は口を堅く結んで、目を見張つて、顔を眞赤にして、小さな手足を出来るだけ早く動かしなから、一生懸命に馬車の後を追つかけて來ます。遊びに追つかけてゐるのでない事は、互に見向きもしなければ、笑ひもせず、口一つ利かないのでも分かります。成程、F氏の言ふ通り、いつまでもいつまでも黙つて追つかけて來ます。決して勞れませんが、決して足を緩めません。

凡そ五六町も追つかけて來たでせうか。私は可哀さうになつて來たので、金を投つて遣らうとしました。すると、前の馬車のK氏が笑ひながら、

『こつちで投るから好いよ。』

と言つて、銅貨を五六枚ばらばらと投げました。子供達は直ぐ金の側へ駆け寄つて、

争つてそれを拾ふ様子でしたが、もう馬車の方は見向きもせず、どんく村の方へ歸つて行つて了ひました。露西亞式です。實に露西亞式です。

又暫く行くと、道の右側に、別荘か何かのやうな、煉瓦づくりの立流な家がありました。廻りは可なり広い林になつてゐます。ふと見ると木の間に、白く塗つた板に Villa Era と書いた看板が出てゐます。

『ここでも人を泊めるらしいですね。』

F氏がかう言ひました。併し、私達の心はもう僧院の方へばかり向いてゐたので、唯ここいらにしては立派な家だと思つた位の事で、何とも思はずにどんく通り過ぎて了ひました。

やがて、道がだらく降りになると、馬車は兩方に小高い岡のある、白樺の林の中

へ這入りました。岡の上には時々家があつて、道から土の段々で上がるやうになつて
 るます。

さういふ段々の一つに、三四人村の娘らしいのが立つてゐて、珍らしさうに私達の
 馬車を見てゐました。いづれも目鼻立のはつきりした、清淨な感じのする娘達でした。
 着物もさつぱりしたのを着てゐました。透き通るやうな薄い色のエエルを肩にかけた
 り、頭に冠つたりしてゐました。

私はその下を通りながら、思はず手を高く振つて挨拶をしました。するとN氏も手
 を振りました。F氏も手を振りました。

娘達も花やかに明るかく笑ひながら、エエルの端を持つて、それを高く振りました。

『日本だと知らん顔をしてゐるか、さもなければ怒るところですね。かういふのを見
 ると、私はこつちの女が好きになります。』

私がかう言ふと、F氏が直ぐ賛成しました。

『如何にも毒のない、開いた心が見えますね。こつちで歌へば、向うでも直ぐに歌ふ
 小鳥のやうですね。日本ではとても見られません。猜疑深い日本ではとても見られま
 せん。』

娘達は私達の馬車の坂の下に見えなくなるまで、いつまでもいつまでもエエルを振
 つてゐました。

林を出ると、直ぐ目の下に水の綺麗な川が見えます。川には船橋が掛かつてゐまし
 た。川の向うは青い草の生へた山で、山の上が又廣々とした野原になつてゐます。野
 原の遠くに、緑青色の丸屋根を頂いた眞つ白な寺院が小さく見えます。私は直ぐとツル
 ゲエネフの『田舎の一月』の舞臺面を思ひ出しました。私はこの芝居を始めて美術座
 で見た時、その二幕目の田舎の景色を見て、露西亞の夏が果してこんなに美しからう
 かと疑ひましたが、今私達の目の前にある景色は、それにも増して美しいのです。私
 (251)

は冬の露西亞ばかりを見て、露西亞を論ずる事の出来ないのを知りました。

『あれがモナステリイですか。』

私がかう言つて、その遠くに見える寺を指さしますと、F氏は頭を振つて、

『いいえ。あれぢやありません。』

と言ひました。

馬車はガタリガタリと上下に揺れながら、手すりのない船橋を渡り切ると、岡の下を左に折れました。

間もなく坂を斜めに上がると、不意に賑かな人聲が聞こえて、私達はいきなり僧院の前の廣場に着きました。

空になつた馬車が四五臺、草の中に立つてゐます。馭者の乞食だの客らしい人だのが、大勢そこらをうろくしてゐます。向うに寄宿舎のやうな白い建物が見えて、その入口の段の上に立つてゐる一人の坊さんを、都の人らしいのが大勢で取り圍んで

ゐます。

私達も馬車を降りると、直ぐK氏の後について、その坊さんの側へ進みました。K氏は露西亞語で二言三言何か坊さんに言ひました。髪の毛を長くした、愛想の好ささうな坊さんは、ちよいと肩を聳かすと、衣兜から電報のやうなものを出して、K氏に何か答へました。

『満員で駄目ださうだ。電報は受け取つたんださうだが、もうその時から一ぱいなんださうだ。』

K氏は私の顔を見て、かう日本語で言ひました。

『ここに集つてゐる人も、みんなけふ来たんださうだが、みんな断られてゐるんださうだ。』

K氏ががっかりしたやうにかう言ふと、K夫人もF氏も副領事のN氏も、みんな失望したやうな顔をしました。

坊さんの立つてゐるわきの窓を見ると、白いレエスの窓掛けの蔭に一家族で來てゐるらしい、楽しさうな團樂が見えました。ふと窓の下を見ると、緑色の制服を着た一人の大學生と、眞赤な着物を着た一人の女學生とが、羨ましさうにそれを見上げてゐました。

(254)

『やつぱり断られた組だらう。可哀さうに。折角連れ込みでやつて來たのに。』

K氏はアンドレエフの小説に出て來さうな、その若い二人を見ながら、眞面目に同情を寄せるやうに言ひました。

『併し、困りましたね。ここに泊まれないとすると、どうしたものでせう。』

F氏がかう言ひますと、

『兎に角、飯だけでもここで喰べさせて貰はうぢやないか。F君、談判を頼むぜ。』

かうK氏が言ひました。F氏は直ぐ「宿屋の番頭」を勤めてゐる坊さんの所へ談判に行きました。

暫くするとF氏は白いルバアシカに眞赤な打紐を締めた、敏捷らしい十八九の若い男を連れて來ました。

『裏の山に食事の出來る所が出來てゐるさうです。直ぐ行かうぢやありませんか。』

K氏はかう言つて、みんなを誘ひました。私達はそのボオイのやうな若い男に案内されて、その寄宿舎のやうな建物の裏手へ出ました。白樺の林のある岡には、ところどころに白い布をかけた粗末な食卓が据えてありました。私達がその一つを占領すると、間もなくさつきの大學生と女學生も遣つて來て、一つ谷を隔てた向うの山にある食卓の一つに向ひ合つて坐りました。

長靴をはいた、白いルバアシカの若い男は、一人で私達五人の給仕を勤めました。どんな物がその時出たか、それはもう覚えてゐませんが、料理の大層うまかつた事だけはいまだに忘れずにゐます。殊に惜しげもなく飲まして呉れた果物の水が素敵にうまうございました。食事が済むと、K夫人は私達の食卓にゐるところを、その儘カメ

(255)

ラに納めました。

K氏は丁度そこへ、縞のルバアシカを着て、汗だらけになつて、自轉車を引いて來た、二人の肥つた紳士と頻りに何か露西亞語で話してゐました。

『もう夕方のお勤めの始まる時分です。一つ寺へ行つて見ようぢやありませんか。』

F氏のかういふのに誘はれて、私達は食卓を離れました。そして、又さつきの廣場へ出ると、高い厚い古びた土の塀について、寄宿舎とは反對の方向に歩きました。門を潜ると、直ぐ目の前に、あまり丈の高くない寺のお堂がありました。お堂の前に屋臺店が一軒寂しさうに出てゐて、珠数や十字架や聖像の硝子の箱に這入つたのを列べて、頭に更紗の布を冠つた汚ない婆さんが店番をしてゐました。

私達は石の段々を上がつて、恐る恐るお堂の中を覗いて見ました。もうお勤めが始まつてゐると見えて、香の煙の中にオルガンの音が嚴かな唸りを立ててゐました。入口のところには、木の皮で拵へた草鞋をはいて、膝から下に襪襦を巻きつけた、浮

浪人らしい男だの、乞食らしい爺さんだの、ストラニイック(巡禮)らしい老人だの、遠慮をするやうにくつつき合つて、首を垂れてゐました。奥の方には都から遊びに來てゐるらしい紳士や夫人や令嬢が、行儀よく列んでゐました。坊さんの列はその人達の前を静々と歩んで、やがて堂の奥の方へ進んで行きました。奥の方は聖像や壁畫が蠟燭の火の蔭にぎらくしてゐて、とてもはつきりとは見えませんでした。私は唯お勤めの時間が來さへすれば、乞食でも浮浪人でも巡禮でも、紳士や令嬢と一緒に同じ寺の中に列んで立つ事の出来る、この露西亞の習慣を美しいと思ひました。

私達はお勤めの済むのを待たずに、直ぐ寺を出て、又もとの廣場へ歸つて來ました。そこには私達を送つて來た馭者が二人、用ありけに私達を待つてゐました。

『モナステリイは満員のやうですから、村へお泊まりになつたら如何でございます。中々綺麗な家がございますよ。』

K氏の通譯に依ると、馭者達はかう言つて勧めるのでした。

「さうさ。百姓家へ泊るのも面白からう。藁をかぶつて板の間に寝るのも亦おつなも
のだよ。」

K氏は笑ひながらかう言つて、馭者の勧める儘に馬車に乗りました。そこで、私達
は面白半分に又馬車に乗りました。

二臺の馬車は勢よく坂を駆け降りました。それから、道のない所を溝を越えたり岡
を横切つたりしながら、あつちの百姓家を訪ねたり、こつちの百姓家を訪ねたりして
歩きました。私達の馬車は危なく幾度か覆りさうにしました。近所のダアチャ(別荘)
へでも來てるらしい、都めいた輕装をした令嬢達が、道端の花を摘みながら、私達
の馬車がガタクリと揺れるのを、面白がつて見てみました、

その内に一軒、中の綺麗さうなのが見つかったので、私達は馬車を降りて、みんな
でその百姓家へ這入つて見ました。這入つた所は物置のやうな土間で、それから一段
上がると、天井の低い板の間を張つた小さな部屋があります。如何にも掃除の行き届

いた、すがくしい感じのする部屋です。中にも驚いたのは床の板の間で、靴で歩く
のは勿體ない程、綺麗に拭き込んであります。部屋の隅には、型通りの聖像が飾つ
てあつて、その前に燈明が上がつてゐます。

内には黒い服を着た色艶の好い婆さんか一人ゐて、これが愛想よく臺所から物置ま
でを私達に見せて呉れました。

「寢臺は家内の者で塞がつてゐるが、板の間へ寝るなら泊めても好い、と言つてゐるが、
どうしたものだらう。」

K氏はかう言ひながら、私の顔を見ました。

『面白いですねえ。』

私はかう答へながら、本當に今夜一晚この家で明かす事が出来たら面白からうと思
ひました。第一、この婆さんの外にどんな家族があるであらう。それに會ふのも楽し
みだと思ひました。その人達はどんな風に食卓について、どんな風に夏の一夜を明か
(259)

すのであらう。それも是非見たいと思ひました。

『併し、それにしてもこれだけの人数の泊まる席はない。先づ駄目だね。』

K氏は忽ち諦めて、婆さんに一言禮を言ふと、直ぐ外へ出て了ひました。私は自分一人でも好いから泊まりたいと思ひましたが、まさかそんな勝手も言へないので、澁々みんなの後について出ました。

『あの、さつき「K. K. K.」と書いた白い板の出てるたところ。あすこへ行つて泊めて貰つたらどうでせう。』

突然、K夫人がこんな事を言ひ出しました。

『成程。そいつは好いかも知れない。兎に角行つて談判して見ようぢやないか。』K氏は直ぐとかう言つて賛成しました。それで若しいけなかつたら、汽車でモスクワへ歸るまでの事さ。』

私達はもう一遍二臺の馬車に別れて乗りました。今度は前の車に、N氏と私とがK夫人を真ん中にして乗りました後の車にはK氏とF氏とが列んで乗りました。馬車はさつき通つた道を又元へ戻つて行くのです。

今まで寡言沈黙だつた副領事のN氏は、何に感じたか俄にはしやぎ出しました。何でも、近頃露西亞へ来る筈になつてゐる許嫁のお嫁さんの事を、K夫人が言ひ出したからでした。勿論、話の内容は忘れて了ひましたが、N氏が頻に自分の奥さんの事を悪く言つた事だけは覚えてゐます。

『来る來ると言ひながら、いつまでも來ないのは、私をほんとに愛してゐないからだ。』こんな事も言つたやうでした。併し、N氏が全然裏を言つてる事は、その嬉しさうな表情で、誰にも直ぐと分かりました。N氏は可愛い奥さんの噂を、みんなの前で出来るだけ長くしたいのでした。併し、自分の妻君を褒めて話す訣にも行かないので、態と悪く言つたものなのです。私はN氏の詞から、決して憎むべき妻君を想像する事

は出来ませんでした。私はN氏の笑みこぼれた目金の下から、洋装の似合ふ可愛い美しい若い外交官の奥さんを、散々に見せつけられたやうな気がしました。

「露西亞では新しい惚け方がはやりますね。」

私は餘つ程こんな事が言ひたかつたのですが、まだそれ程馴染でもない人に、そんな戯れた口の利き方をしてもと思つて、可笑しいのを堪へて黙つてゐました。

前の馬車ではこんな不生産的な話はずんでゐるのに、後の馬車ではK氏とF氏とが、道端の畠を指さしながら聲高に露西亞の農業か何かを論じてゐるやうでした。

道が土手のやうになつてゐて、左右の百姓家が道よりは低い所にあるやうな所に出ると、往來の眞ん中に十二三の男の子が赤ん坊を抱いて立つてゐました。馬車がその子の直ぐ側を通り過ぎると、男の子は赤ん坊を高くさし上げながら、私達に向つて、何か大聲に叫びました。私は私達がかからかはれたのだらうと思つてゐました。すると、後の馬車からK氏が、

「O君。今あの子が何て言つたか分かつたかい。」

と訊くのです。

「いいえ。分かりません。」

と、後を振り返りながら答へると、

「安くしとくから赤ん坊を買つて行かないかと言つたのだよ。」

私は思はず大聲を上げて笑ひました。併し笑つただけでこの面白みは盡きませんでした。私はやつぱり「露西亞」だなあと思つたのです。

往きに見た、金が欲しさに黙つて馬車をいつまでも追つかけて來る子供達。歸りに見た、守が面倒さに赤ん坊を賣らうといふ子供——そこにも私は「露西亞」といふ大きな國を見るやうな気がしたのです。

一行は間もなくVilla Eraに着きました。

生垣の間を通つて、英語で言へばCastileとでも言ひさうな、煉瓦づくりの宏壯な建

物の支關をおとづれると、そこへ現れたのは新しい背廣服をきちんと着て綺麗に磨いた長靴を穿いた、三十二三の、小肥りな、色の白い、髭の美しい立派な紳士でした。私達は互に顔を見合せて、失望したやうに目を落しました。「やつぱりここは宿屋ぢやなかつたのだ。別荘だつたのだ。」みんなさう思つたのです。

ところが、その若い紳士は、にこくと愛想よく玄關の石段を駆け降りて来て、「バアシヤルスタ。バアシヤルスタ。」と、頻に私達を家の中へ招するのです。私達は少し煙に巻かれた形で、誘はれる儘に、二階へ行く階子段のある應接間のやうな所に通りました。

段々この若い紳士の話を聞くと、別荘の古いのを借り受けて、やつぱり夏場の宿屋を營んでゐるのだと言ふのです。K氏夫婦の寝る部屋はあるが、生憎他の三人の寝る部屋がない。三人が天井裏の部屋で我慢して呉れば、お宿をしても好いと言ふのです。この少しも宿屋の主人らしくない男は、やつぱり宿屋の主人だつたのです。

『何處でも好いぢやありませんか、吾々は。どうせ一晚の事ですもの。』

F氏のかういふ尾について、N氏も私も賛成しました。井ラの主人は私達の相談の濟むのを、子供らしい心配さうな顔つきをして待つてゐましたが、愈々泊まる事になつたと聞くと、嬉しさに私達の手を、一人一人振つて歩きました。

K氏は井ラの主人に私を紹介して、

『この人は短い旅行で露西亞に來た人だが、チエエホフのものやゴオリキイのものを日本語に翻譯した事のある人だ。』

といふやうな事を言ひました。すると、可愛い目つきをした井ラの主人は、暫く首を傾けてゐましたが、やがて如何にも不思議さうに、

『それは分かりませんね。露西亞語の分からない方に、どうしてチエエホフやゴオリキイの翻譯が出来るのでせう。』

といふやうな事を言ひました。

私は度膽を抜かれました。この無邪氣な、單純な、そして正當な翻譯論に誰が異議を挟む事が出来るでせう。私は顔を赤くして黙つて了ひました。

『なあに。それは英語や獨逸語からするのさ。露西亞の物を英吉利人や獨逸人の譯したので讀んで、それを日本語に直すのさ。』

K氏はかう言つて、私を辯護して呉れましたが、井ラの主人にはそれがやつぱり理解出来ないやうでした。

『でも。露西亞語が分からないで。』

と言つたきり、もうその問題では一向私達を信用しないやうでした。

暫くすると、主人の若い妻君が挨拶に出て來ました。丈の高い、瘦せぎすな、少し神經質らしい所のあるのを可愛い目が隠してゐる、二十四五の美人でした。露西亞更紗のさつぱりした装をして、三つ位の男の子の手を釣り下けるやうにして引いてゐました。後には乳母らしい婆さんが、もつと小さい女の子を抱いてゐました。

井ラの主人は妻君の事を、ナタリア・ミハイロウナと丁寧と呼んだり、ナタリアジャと遠慮なく呼んだりしました。私達は直ぐこの男が女の入婿である事に気がつきました。井ラの主人は妻君の命する儘に、外の部屋から椅子を持つて來たり、そこにある机を片づけたりしました。

『どうも生れながらの宿屋商賣ではないらしい。相當に由緒のある人の成れの果てだらう。』

K氏はこんな事を言ひました。

この井ラの家族が、主人夫婦と子供二人だけでない事は、夜の食事の時に分かりました。

食堂は裏庭に面した、天井の高い、それはく、広い部屋でした。長く續けた食卓には、二十人位の客が坐れさうでした。

私達はここで丈の低い、顔の赤い、髭の白い、品の好い老人に紹介されました。老人は主婦のお父さんでした。それから大學生の制服を着た主婦の弟、黒服を着た器量の悪い親類の娘、さういつた人達にも紹介されました。部屋がないといつて断つたのにも關らず、泊まり客らしい人は私達の外にたつた二三人の男がゐるだけでした。主婦は女王のやうな態度で、臺所に近い、食卓の正面に坐りました。大勢の女中が見上げるやうな戸口を出たり這入つたりしました。

私はその時喰べたザクスカのうまさをいまだに忘れる事が出来ません。その他の料理も舌が落ちる程の美味でした。葡萄酒も上等でした。クワスも飛び切りでした。私はこんな御馳走をこんな大勢の家内で飲んだり喰べたりして、そして家族よりも少ない位の人數を客にして、それで合ふものか知らと思ひました。部屋がないといふのも、恐らく家族の人が好い部屋を占領してゐるからでせう。私はどうしても道樂に宿屋をやつてゐるのだと思へませんでした。

併し、井ラの主人は普通の宿屋の主人よりも腰が低くて、そして親切でした。主婦の弟の大學生もまるでボオイか何ぞのやうに立ち働きました。この餘り學問の出來さうでない大學生は、私達のコップに酒をついで呉れたり、私達の皿に補充の麵包を運んで来て呉れたりしました。

私達は食事を終ると、硝子で張つたエランダへ出て、卓上電燈を真ん中に置いた圓卓を取圍んで、Bridge といふ骨牌遊びを始めました。私は骨牌といふものを全く知らないのです、K夫人を附き添ひ役にして、夫人の言ふ儘に「心臟」を出したり「金剛石」を取つたりしました。

私達がかうしてチエエホフの『イワノフ』といふ芝居にあるやうに、「Two in hearts」、「Pass」、「Two in spades」、「Pass」、「Pass」、「Pass」などと夜の更けるまでしめやかに遊んでゐました。

K氏夫婦に別れて、私達三人が寂しい屋根裏部屋に案内された時は、もう十二時を

餘程過ぎてゐました。併し、低い硝子の戸の外空はまだ薄明かるくて、頻に鳥が鳴く聲がしました。

私とF氏とは眠られぬ儘に、またN氏の妻君談を聞かせられました。

明くる日は、朝食事を済ますと、みんなで屋敷の廻りを歩いて見ました。私は主婦の弟に大學の制帽を借りて冠つて出ました。

家の裏手には深い白樺の林がありました。林の中には住み荒らした森番の小屋がありました。私はどれと言ふ事なしに、ツルゲエネフの小説を思ひ出しました。もと風呂場だつたらしい古い大きな建物をも見ました。

『O君。君がさしづめその帽子で、あの風呂場に泊まつてゐれば、「櫻の園」のベエチヤ・トロフイモフだね。』

K氏はかう言つて、愉快さうに笑ひました。

私達は水を隠すまでに水草の一ぱい生へてゐる古い大きな池の廻りをも廻りました。池の縁にも骨ばかりになつた古い小屋が傾いてゐました。水草には黄いろい花が鉦を蒔いたやうに咲いてゐました。

K夫人は池の縁の林の中で一度、家へ歸つて、半ば崩れたエランダの上で一度、私達の姿をカメラに入れました。

晝飯が済むと、私とF氏とK夫人とはゆうべ會つた主婦の父と器量の悪い親類の娘とに誘はれて、外の往來に近い林の中へ、茸を探りに出かけました。

老人は鼠色のアルバカの背廣を行儀よく着てゐました。老人は露西亞語の外なんにも話しませんでしたが、親類の娘は佛蘭西語をも獨逸語をもよく使ひました。彼女はF氏とは露西亞で話し、K夫人とは佛蘭西語で話しました。そして私とは獨逸語で話しました。私達は道々どんな話をして行つたでせう。それはもう覚えてゐません。併し話の一つに支那人と日本人との比較論があつた事だけは、ほんやり思ひ出されます。

ニコライ・イワノ井ツチ——老人の名はかういふのでした——は茸を探し當てるのが上手でした。そして、食べられる茸と食べられない茸を見分けるのが確でした。老人の指さす所には、なんにもなさうな草の中にも、きつと好い茸が隠れてゐました。私達の見つける大きな茸は大抵食べられないのばかりでした。

私達は眞つ赤な野苺をちぎつて食べたり、小菊のやうなマルゲリイトの花を摘んで胸にさしたりしました。そして、茸の方はニコライ・イワノ井ツチ任せにしてしまひました。

五人の一つ宛持つて出た籠は、茸でみんな一ぱいになりました。ニコライ・イワノ井ツチの爺さんは嬉しさうに、

『晩には皆さんに食べさせて上げますぞ。』

と言つて、一人でみんなの籠を両手に持ちました。

家へ歸つて來ると、玄關の石段の下で、男の子と女の子が乳母と一緒に遊んでゐま

した。親類の娘に聞くと、子供達の名前はエエチャとニノチユカと言ふのでした。私は可愛い二人の子と暫くそこで遊んでゐました。併し、私は悲しい事に、この小さな子供達とさへ、なんにも話す事が出来ないのです。

それから、子供達と、ニコライ老人を除いたあとの三人とで、表の往來の方へぶら／＼歩いて出ました。往來を越えて遠くに低く見える村には、市場でも立つてゐる様子で、大勢の人が蟻のやうに群がつてゐました。ルバアシカの赤や青や、女の着物のけば／＼しいのが、まるで色紙を剪つて切らしたやうに見えます。

暫くすると、往來の下の方から急調な太い音楽の響きとぶつけるやうな高い歌の聲とが聞こえて來ました。村の若い百姓達が手風琴やバラライカを鳴らしながら、歌を唄ふ娘達を先きに立てて、行列を作つて坂を登つて來るのです——成程今日は日曜日でした。

『暢氣なものですねえ。ああや／＼村中練り歩くのです。』

F氏は私の顔を見ながら、かう言ひました。
 百姓の若い男女は更に手拍子を取りながら、私達の前を賑かに通り過ぎて行きました。
 た。

(274)

女中が晩の食事を知らして来たので、私達は快く減つた腹を食堂に運びました。
 併し、私達はいくら待つても、いくら待つても、楽しみにしてゐた茸の料理を、食卓の上に見る事が出来ませんでした。その内、菓子となり茶となつて了ひました。
 私達三人は言ひ合せたやうにニコライ老人の顔をぢつと見ました。併し、老人はもう何も彼も忘れて了つた様子で、平氣でサモワルの振子をひねつてゐました。

私達の都へ歸る時が来ました。

近所に馬車がないので、チエレエガといふ百姓の荷馬車が二臺雇はれました。私達

は野菜物か何かのやうにこれに積まれなければなりません。その上私達はその晩都へ歸るといふ器量の悪い親類の娘をも引き受けなければなりません。

娘は私達の車へ割り込んで這入つて来ました。と見ると、大きな新聞紙の包を抱へてゐます。荷馬車が一揺り揺れて動き出すと、新聞紙の一隅がほつれて、そこから茸が澤山顔を出しました。

『ひどい奴だ。爺さん、僕達にさんざ取らせて置いて、みんなこの娘に遣つて了つたのだ。』

F氏は呆れたやうに日本語でかう言ひました。

『これもあなたの所謂露西亞式なんでせう。』

F氏は更に私の方を向いて、諦めるやうに言ひました。

娘は新聞の口の明いたのを直さうともせず、平氣で「私達の茸」を「自分の土産」にしてゐました。

(275)

これこそ露西亞式だ。これこそ本當に露西亞式だと私は思ひました。そして、私は「露西亞」といふ無邪氣な國が愈々可愛くなつて來ました。

(276)

露西亞式と言へば、私達はこの歸り道に、ほんとに露西亞式な或物を見ました。

それは或小高い岡の上で、眞つ赤なルバアシカを着た年寄の百姓が、しやがんで、尻をまくつて、排泄をしてゐた事です。

これは恐らく歐羅巴のどんな田舎へ行つても、見られない景色でせう。

(一九一六、一二、一六)

大正六年八月五日印刷
大正六年八月八日發行

「北歐旅日記」

定價金七拾錢



著者 小山内 薫
發行者 和田 利彦
印刷者 金 綱 彌
印刷所 博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百〇八番地
東京市小石川區久堅町百〇八番地

發行所

東京市日本橋區
通四丁目五番地

春 陽 堂

電話 本局 五十一番
振替 一六一七番

田山花袋氏長篇新作

★ ★ ★

■一兵卒の銃殺

四六判洋装
定價金一圓
送料八錢

現文壇の巨擘花袋氏が、想を構ふること数年筆を執ること約一年にして完成し初めて世に問ふ一大長篇である。一個の兵卒として遂に銃殺の刑に處せらるゝ一青年!!! そもそも彼は如何なる生ひ立ちを有し、如何なる心的苦悶を経過し、如何なる罪を犯したのであるか。現代生活を圍繞するもろくの社會問題は此の青年の一生を中心として極て大膽に深刻に藝術化せられて居る。宿命の破綻か性格の悲劇乎。兎に角現代の生める慘たる生活悲劇が嚴として此處に横はつて居る大正文壇の傑作として吾等は江湖に此一書を捧げる光榮を有す。

恐るべき時代の産物

■合歡の花

價九十五錢
送料八錢

文壇多年の権輿たる著者は、最近新しき感激に動かされ數篇の傑作をなせり呪はれたる愛の二家族。戀の初老、旅に迷ふ心中のかたはれ。藝妓屋の陰日向。行き方なき遁世の僧正と其戀の殘像を慕ふ凄麗なる女。寒村の男女教師の甘き契。何れも人生に對する『飄的冒險』の試みにして、數奇なる運命と涙ぐましき人生とを描出せる選集なり。

讀者諸賢の便を思ひ合本縮刷して刊行す携帶至便而も賣價は大本の半額以上

夏目漱石氏作

合本 鶉籠、虞美人草

價一圓五十錢 送料金八錢

合本 三四郎、それから、門

價一圓五十錢 送料金八錢

合本 彼岸過迄、四篇

價一圓五十錢 送料金八錢

草 枕

價四十錢 送料卅錢

滿韓處々

價卅五錢 送料卅四錢

夢十夜

價卅五錢 送料卅四錢

思ひ出など

價四十錢 送料卅四錢

坊ちやん

價卅五錢 送料卅四錢

切抜帖より

價七十錢 送料六十錢

谷崎潤一郎氏著

刺青 外九篇

價九十五錢 送料八錢

里見淳氏著

善心惡心

價九十錢 送料八錢

文壇唯一の異色ある作家谷崎氏の傑作集なり。收むる處刺青、麒麟、少年、替間、惡魔、續惡魔、秘密、信四、象、法成寺物語。悉く芳烈絢爛なる表白、妖凄なる男女の世界、艶美なる悦樂、病的興味を恣にしたる天才藝術の凝成なり。氏は是等數篇の發表によりて、忽ち我小説界の平板單調を打破し、新たな藝術境を開拓せる偉大なる事業は今更に贅せず。本書は實に我文壇天授の寶玉なり耕花氏の八熱地獄の新裝幀又出版界の偉觀と云ふべし。

新銳なる作家の第一集は、今や旺盛なる期待を擔ひ、文壇の寂寞を破る。收む處「河豚」「勝負」「母と子」「俄あれ」「晚い初恋」「嫂の死」「善心惡心」及び「無題の小説」等として異常の注意を牽ける傑作十篇。其描くや若き俳優の死、灯先も息望る勝負場、藝者上りの母と産摩の雛藝妓、戀の撞着、嵐のやどり、殺人後の心理状態、放蕩の後の初恋等、悉く氏が灼熱せる天才的主觀の溶爐を通して、渾然玉化せる新藝術の精粹也。

■ 長田幹彦氏作 ■

津田青楓氏裝釘

■ 情炎

縮刷美本 價六十錢 送料六錢

子までなした相愛の仲をも破る義理の假面、愛なき亡霊の如き結婚、清純な處女心を濁す疑惑、良人の秘密に魂を裂かれ、毒を仰ぐ若き妻の慘劇。これ悉く人の世に狂ふ情火の一閃。わが幹彦氏材を栗上流家庭の秘密事にとり、豊醇瑰麗なる筆を揮つて凄艶きはみなき此物語を成す。眞に之れ至情至愛の事實小説。

情火一閃若き男女を惱殺す

■ 舞扇

價九十錢 送料八錢

西京は女の都也。幹彦氏祇園樂土の舞妓を材とし本書を編む。行文豊麗舞妓の口紅よりも紅く眞に戀の國の哀歌。

■ 雪の夜話

八十五錢 送料八錢

凍雪の國々を漂泊せる間の藝術的收穫の全部。幹彦氏の榮譽なる位地は本書により永遠なり。雪岱氏の裝幀善美。

■ つゆ草

價九十錢 送料八錢

優しい俊子が愛人を抱いて北海の雪原に惨死するを描く。濃霧に響く二發の銃聲は永遠に刻まれた不可解の謎か。

□ 長田幹彦氏作 □

傑作 選集 ■ 紅夢集

(刷縮)

木版刷表紙美本 價九十五錢 送料八錢

本書は作者が會心の雄作自選集也。一躍文名を馳せたる處女作『零落』を初め傑作八篇を收む。其描く處、出水時の悲劇、旅役者の一群、北海の果に身を埋むる賣女、浮世双紙に見る如き蕩兒、京坂の柳暗花明、何れも數奇なる人生の變轉を描破せるものにして、潜々落花の哀れを思はしめ、喃喃紅夢の甘きに醉はしむ。歡樂と流浪、愛着と廢殘の香氣全卷に溢る。眞に人情小説の白眉。

傑作 選集 ■ 白絃集

(刷縮)

木版表紙五五〇頁 價九十五錢 送料八錢

收むる處「扇昇の話」「師匠の娘」「尼僧」「お鶴」「浮」等の數篇。その描くや北海を渡り歩く若き旅役者が賣女に捨てられ陋巷に窮死する哀話。下町に育つた師匠の娘の樂慾。妙齡の尼僧と美貌の僧侶との戀物語。白痴の下婢の男ゆゑの盜み。幻怪なる凍湖の不思議な自然と人生。浪華にさまよふ女義太夫の心を嘯むが如き哀愁の戀。雪の國を駈落する娘と旅役者。いづれも濃かなる情海の幾波瀾、魂を喰る悲戀の極致を描き、文壇一方の特色ある代表的作品也。

□ 泉鏡花氏作 □

■ 由縁文庫

(容内) □ 泉物語 □ 月夜遊女 □ 浮又ヶ池
 □ 龍度更紗 □ 霞降風 □ 白金之繪圖
 □ 檜知火卷 □ 櫻奇譚 □ 銀短冊

送羽二重表紙 一圓五十錢

■ 鏡花選集

(容内) □ 湯島詣 □ 婦系圖上卷 □ 婦系圖下卷
 □ 通夜物語

送羽二重表紙 一圓五十錢

■ 遊里集

(容内) □ 白鷺 □ 第一菟菟本 □ 酸尺漿
 □ 紫手遊網 □ 第二菟菟本 □ 達ふ角
 □ 系飾砂子 □ 辰巳巷談 □ 南地心中

送羽二重表紙 一圓五十錢

鏡花氏の作品の、我が文壇に於ける特種の位置に就ては、吾等の多く云ふを俟たざる處、實に後來の日本文學史を飾るべき雄にして珍なる藝術である。

「由縁文庫」以下三集は、いづれも任俠を經とし、戀を緯とせる錦篇にして、實に江戸情調の結晶なり。戀に生き戀に死ぬる、歡樂の血涙を以て充されたる傑作の堆集なり。粹艶なる雪岱氏の装幀は、よく内容と相俟つて所謂縮刷本の俗態を脱せるもの。

■ 俠艶情話集 ■

各册十四錢・送料各料四錢

江戸文學の中心の興味は、俠にして而も艶なる生活の調の表現に存す。今や新江戸趣味復活の機運の鬱勃たるものある時、其先鋒の炬火をかざすべき本叢書の刊行せらるゝ素より偶然に非ざるなり。哀幽極まりなき情調の世界に生きんとする人々、洗練せられたる生の悦樂に歡喜せんとする人々の、絶好伴侶たるべきものは本叢書なり。

(裝 畫)
 鏑木清方氏
 池田輝方氏
 池田蕉園女史
 鮎崎英朋氏

第一篇 □ 幻の繪馬 泉鏡花氏作

第二篇 □ 小 葛 長田幹彦氏作

第三篇 □ お八重 田山花袋氏作

第四篇 □ 女魔術師 岡本綺堂氏作

……毎月連續出版……

尾崎紅葉氏作

木版

- 關 實 一
- 堀 澤 宮
- 荒 尾 謙 介
- 赤 塚 滿 枝
- 弘 光 氏 筆
- 藤 岡 女 史 筆
- 英 明 氏 筆
- 清 方 氏 筆
- 富 山 唯 繼
- 山 元 筆
- 藤 野 君 子
- 田 邊 彌 齋
- 古 洞 氏 筆
- 流 瀨 氏 筆
- 五 葉 氏 筆
- 春 仙 氏 筆

金色夜叉

縮合本

松洲氏裝
價一圓卅錢
送料八錢

明治文壇の偉傑紅葉氏が其最後の七年を擬し、死迫るに至つて、尙ほ筆を擱かざりしもの。實に故紅葉氏が血を以て購ひ得たる雄篇にして、明治文學史が血を以て特記すべき大作なり。……新裝善美……

……若き血に狂ふものよ、汝の足下は斷崖なり。……

縮刷 青春 某風葉氏作

新活字八百頁
一圓五十錢
送料八錢

抱月氏曰く「當代の最も複雑なる思想の階級を代表的に描かんとした……」と、誠に此評言の示す如く、本作一度世に出づるや忽如として人氣を恣まにし、新時代人に好個の題目を提供して已まず。多情多恨なる青年欽哉と情に脆き繁子の名は彼等が犯せる罪と共に、永久に青春の血の高鳴りを記念すべきものなり。時代の英雄か時代の犠牲者か若くは久遠の罪人か。これ等すべての疑問は、時代の赴く處を知る者のみ獨り答へ得るものなり。讀者よ、深刻なる人生問題に觸れよ。

小山内薫氏作

大川端

縮刷極美本 紙數四百頁
價七拾錢 送料六錢

▽新しき都會小説なり△

洛陽の紙價を高からしめし著者が唯一多情多恨の長篇作正雄と云ふ青年の初戀ごころに映じたる君太郎、小さと、せつ子の三美妓を中心として東京の色町の優しい哀樂、頓てすべての女に別れて獨り身を嚙むやうな哀愁に悶える男の心に、何人か紅涙の潜たるを禁じ得やう、輕妙なる才筆を包む鹿の子切れの装幀もよく此物語の情調を語つて居る

▽新しき蘇小秘史なり△

戀に望みを失ひて、世を捨てし身の世に捨てられず、主家の運命を影に負ひて、二十六年を浮沈の波に漂はせし齋藤瀧口時頼が多恨な

高山樗牛氏作

瀧口入道

縮刷 齋藤英朋氏裝
價一圓卅錢
送料八錢

る生涯を描き、平家一門の世に類ひなき末路を偲ばしむ。天才故高山樗牛博士が若き悲しみの全幅を披瀝せる光輝ある出世作である。

定價四十五錢
送料六錢

■ 戲曲選集 ■

劇壇の沈滞其の極に及んで新國民劇復興の聲今や漸く天下に喧しからんとす。茲に新古名戲曲を撰して本叢書を刊行す。劇壇新機運の招來爲めに鮮やかなるを見るべし。

舞臺寫眞挿入
各冊金五十五錢
送料各六錢

■ 沓手鳥孤城落月

坪内逍遙氏作

時代の要求により全部改作出版せらる。哀れ七日月の落つると共に、其武運永へに地に限ちたる大阪城を主題とし、麗美なる淀君が狂亂、秀頼が薄運、家康が仁慈、且元が血涙等心肝虹の如き諸相を點配す。博士が魅力ある境遇悲劇の新様式の試は、必ずや好劇家の視野を新たにすべきを信す。

■ 俠客春雨傘

福地櫻痴氏作

本篇は櫻痴翁が賑々しき新歌舞伎劇也。……誰だと思ふ一本立の男達藏前の曉雨が仁俠、巷を荒す鐵心齋、釣鐘庄兵衛が陰惡の幾葛藤は、紅花匂ふ色里を背景として、善惡表裏の好場面を描出す。各幕皆江戸情調の高度なる劇化にして好劇家必讀の名著。

■ 脚金色夜叉

紅葉氏原作
屋葉氏補脚

■ 脚日本橋

鏡花氏作

□ 河竹繁俊氏編 □

■ 默阿彌物語

縮刷四百五十頁
定價八十五錢
送料金八錢

滿部の人氣を獨占せる日本の一大狂言作者河竹默阿彌翁の數多き戲曲中より「村井長庵」「三人吉三」等の十傑作を選び、新に物語風に書き改めたるもの本書也。何れも華かな舞臺を搖蕩する傳法肌の男女、戀の立引、めぐる因果の恐しさ、善惡とりくみの好場面を髮髻せしめ、讀者をして遺憾なく江戸情趣を玩味せしむ。正に之れ讀むべき芝居物語にして、又默阿彌物の研究資料として好適なり。

■ 河竹默阿彌

珍貴圖挿入
價一圓六十錢
送料八錢

大近松と並べて我國戲曲家の双壁と目さる、河竹默阿彌を傳し、或は論じたるもの、擧げて數ふべからずと雖、彼の人物と一生と時代と事業とを論じて周到を盡せるものは獨本書あるのみ。蓋、本書は翁が二世の嗣子にして新進戲曲家たる繁俊氏が、無限の材料の堆積裏に没頭して、遂に大成せられたる紀念的著述たればなり。翁が家系、生ひ立ち、發心等の機微なる消息に筆を起し、劇作者としての翁が一生を巨細に亘りて傳す。而も翁が一生の背景をなす江戸末期及び明治初年の文物亦遺憾なく本書に論じ盡されたり。翁が全傳として、全作梗概としてまた歌舞伎發達史として、江戸世相史として實に空前絶後の一大偉著たるを失はず。

海軍水交社藏版

獨逸の膨脹

(著者たるも與を賞ンラエチ)

佛國學士院にて表彰

砲烟漲り血なまぐさき敵前
五百メートルの地點にある
原著者アンドリヨン少佐は
今般我國の爲めに本書の出
版權を讓與されたり。

四六判美本
壹圓卅錢
送料八錢

全歐洲を敵として屈せざる獨逸が、今日の強大を齎らせる原因と徑路とは極めて興味深き研究題目である。原著は大戦に先ちて刊行せられ早くも今次の戦禍を豫言せるが如く佛國學士院之を表彰し國民必讀の良書となす。今や我海軍も亦邦家の爲め此名著を一般國民に推舉せんとす。此書の如何に有益なるか推して知るべし。

南洲全集 愛山編

明治維新の意氣は南洲に見るべし
本書は南洲の史傳、建言書詩歌遺訓書翰等全部を收めたるもの、實に維新の活史なり。

一圓五錢
送料二錢

大將東郷 健堂著

材料蒐集十年、起稿三年、日本武士の眞骨頭を活寫せる史傳にして一面日本海戦史なり。筆致の豪快天馬空を驅けるが如し。

二圓三錢
送料六錢

山路愛山氏著

東西六千年

著者が比類なき博學と批評的天才との結晶せるは本書也。世界の十民族論より説き起して六千年に亘る文明批評を試みたるもは本書也。書中ナポレオンを論じ、カーライル、トルストイ、イブセン、シヨール、ベルグソン等を論ずる堂々たる論陣に至りては眞に彼以前に其人なく彼以後に其人なきの觀あり。思想を本とし、歴史てを材とし人文の意義を究めたる點に於て正にオイケン博士の「大思想家の人生觀」の如し。

四六判八百頁
價一圓六十錢
送料八錢

大町桂月氏著

傑人 佳人

四六判特製
十錢送料八錢

世に傑人佳人と稱せらるゝ者も其名餘りに美大にしてその實の伴はざる者少なからず、然るに本書收むる所は、名實共に具備せる五十有餘名の傑人佳人が傑出せる個性を抽記すると同時に一々之に深辣なる批評メスを加ふ、自由自在なる氏の靈筆は内容と相俟つて熱時人を熱殺し寒時人を寒殺するの妙味に富む。青年の讀物として眞に近來の快著なり。

名家傑作集

錢六稅郵 □ 錢拾五册壹

<p>(1) 不言不語 尾崎紅葉著 <small>「不言不語」は美しき妻女の悲劇。「心の闇」は盲人の片戀物語。</small></p>	<p>(2) 其面影 二葉亭著 <small>不遇の才人が流涙する經路を描き、現實的傾向の先驅を成す。</small></p>	<p>(3) 照葉狂言 泉鏡花著 <small>可憐の少年と女狂言師との情愛を描ける清純なる浪漫的物語。</small></p>	<p>(4) 水彩畫家 島崎藤村著 <small>最初の試みになれる記念的作品。印象の鮮情感の新を看よ。</small></p>	<p>(5) 白露紅露 幸田露伴著 <small>深遠なる宗教的哲學的傾向を高揚す、正に代表的東洋藝術也。</small></p>	<p>(6) 野の花 田山花袋著 <small>「野の花」は主情的傑作。「重右衛門の最後」は新藝術の第一聲。</small></p>
--	--	---	---	--	---

……以下續刊……春陽堂

364
244

終

